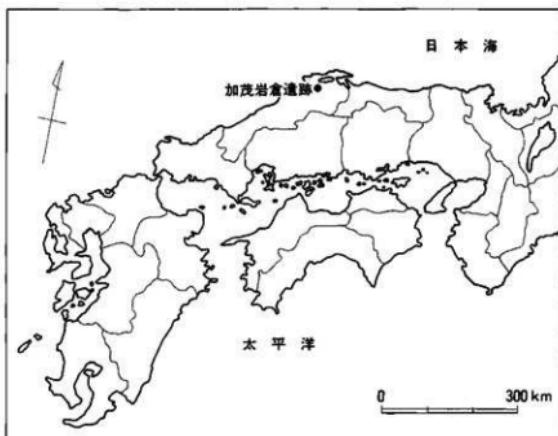


加茂岩倉遺跡発掘調査概報 I

1997年3月

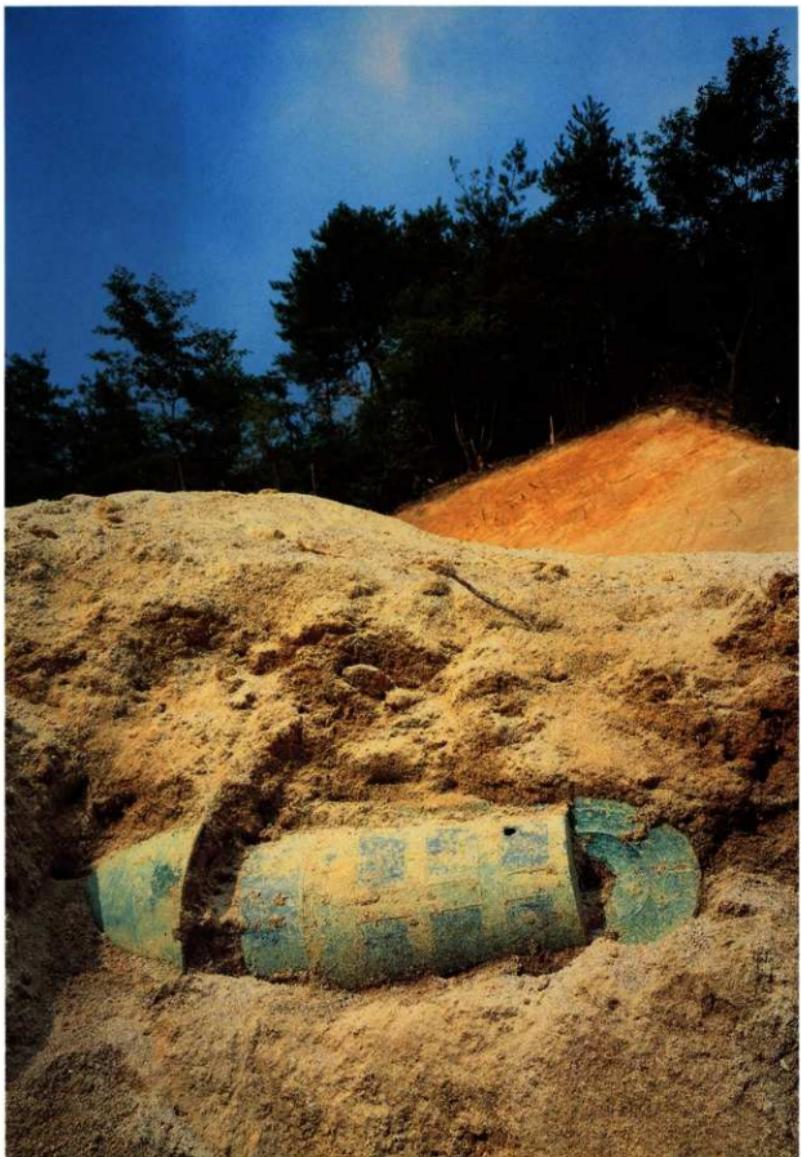
加茂町教育委員会

加茂岩倉遺跡発掘調査概報 I



1997年3月

加茂町教育委員会



発見時の埋納状態の銅鐸

序

平成8年10月14日、「加茂岩倉遺跡」から出土した大量の銅鐸の発見は、これまでの古代史の定説を揺るがすとともに、加茂町民はもとより、全国の考古学・古代史ファンに夢とロマンを与えるものでした。

調査が進むに連れ、銅鐸の数は、一か所の遺跡としては全国最多の記録を塗り替える39個となり、また、入れ子、同范銅鐸、絵画、「×」の刻線など新たな発見とともに、銅鐸の謎のペールが少しづつはがされてきています。

全国の神々が山雲に集う「神在月」の10月に発見された銅鐸は、まさしく神々からの贈り物であり、2千年前の眠りから覚めた銅鐸が、私たちに何を伝えようとしているのかを探求することは、出雲古代史、日本古代史を考える上で極めて重要なことであります。

この報告書は、これまでの発掘調査の概要を報告するものでありますが、調査の成果が銅鐸の謎に迫るとともに、広く埋蔵文化財に対する理解に役立つことができれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたってご指導、ご協力を賜りました文化庁、奈良国立文化財研究所、島根県教育委員会をはじめ関係各位に対し心から厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

加茂町教育委員会

教育長 土江博昭

例　　言

1. 本書は、加茂町教育委員会が平成8年度国庫補助事業として実施した島根県大原郡加茂町加茂岩倉遺跡発掘調査の概報である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 加茂町教育委員会

調査指導 文化庁記念物課、井上洋一（東京国立博物館先史室長）、岩永省三（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官）、小田富士雄（福岡大学文学部教授）、久野雄一郎（奈良県立橿原考古学研究所指導研究員）、肥塚隆保（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）、近藤喬一（山口大学人文学部教授）、佐原真（国立歴史民俗博物館副館長）、沢田正昭（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長）、難波洋三（京都国立博物館考古室長）、速水保孝（元島根県立図書館長・古代史研究家）、春成秀爾（国立歴史民俗博物館教授）、町田章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長・島根県文化財保護審議会委員）、村上隆（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官）、森浩一（同志社大学文学部教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）

事務局 速水雄一（加茂町長）、矢内高太郎（加茂町助役）、上江博昭（加茂町教育委員会教育長）、岸本邦夫（同教育次長）、杉原顕道（同社会教育指導員）

調査員 吾郷和宏（加茂町教育委員会社会教育主事）、蓮岡法暉（島根県文化財保護指導委員）勝部昭（島根県教育庁文化財課長）、穴道正年（島根県埋蔵文化財調査センター長兼古代文化センター長）、松本岩雄（島根県古代文化センター主幹）、西尾克己（島根県教育庁文化財課主幹）、広江耕史（同文化財保護主事）、熱田貴保（同文化財保護主事）、錦田剛志（同主事）、岩橋孝典（同主事）

調査補助員 北島大輔（明治大学院生）、東山信治（新潟大学研究生）、松尾充晶（京都大学研究生）

調査参加 佐藤綾子（県埋文センター調査補助員）、中村陵子（同）、落部未知果、錦織敬夫、中林明正、庄司陽吉、井上進、石原隆文、杉原朋光、青木信子、高山和枝、平井未美

3. 発掘調査に際しては、土地所有者の方々、地元岩倉自治会、夜間警備に携わっていただいた方々など終始多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

4. 発掘調査に際しては、下記のとおり各分野に依頼して行った。

基準点測量—ワールド航測コンサルタント㈱、銅鐸山上状況写真測量—アジア航測㈱、青銅器探査—応用地質㈱、写真撮影—奈良国立文化財研究所 牛嶋茂、写房楠華堂 楠本真紀子、銅鐸圧痕型取り—㈱京都科学、記録ビデオ製作—㈱ビデオ・プレス、調査用覆い屋工事—㈲荒木工務店、見学用足場工事—㈲荒木建設

5. 掘図中の方位は、国上調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

6. 本書に掲載した遺跡の分布図は建設省国土地理院発行のものを、遺跡周辺地形図は加茂町農林課が作成したものを使用した。

7. 本書は吾郷、熱田が執筆し、吾郷が編集した。また、第4章「出土銅鐸の概要」は難波洋三氏に原稿執筆を依頼し、ご寄稿いただいた。

目 次

序

例言

日次

挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 位置と歴史的環境	4
第3章 調査の概要	7
1. 発見時の状況	7
2. 青銅器探査	7
3. 埋納坑の調査	8
第4章 出土銅鐸の概要	14
第5章 まとめ	26

挿図目次

第1図 斜面の地上調査風景	2
第2図 加茂岩倉遺跡周辺の地形	3
第3図 加茂岩倉遺跡とその周辺	5
第4図 出雲地域の主要遺跡	6
第5図 発見時の状況	7
第6図 銅鐸出土地点と地形測量図	8
第7図 1号坑痕の同定調査	10
第8図 埋納坑実測図	12
第9図 埋納坑上層図	13

表 目 次

表1 加茂岩倉遺跡出土銅鐸一覧	24~25
-----------------	-------

図版目次

巻頭図版	発見時の埋納状態の銅鐸	図版17- 2	33号鐸
図版1	加茂岩倉遺跡と周辺の遺跡	図版18- 1	38号鐸
図版2- 1	遺跡近景（工事前）	図版18- 2	39号鐸
図版2- 2	遺跡近景（発見時）	図版19- 1	2（3）号鐸
図版3- 1	埋納状態の銅鐸と圧痕（発見時）	図版19- 2	11（12）号鐸
図版3- 2	発見時の出土銅鐸	図版20- 1	31号鐸
図版4- 1	攢乱土中の銅鐸出土状況	図版20- 2	32号鐸
図版4- 2	攢乱土除去後の状況	図版21- 1	34号鐸
図版5- 1	埋納坑埋土堆積状況	図版21- 2	5号鐸
図版5- 2	埋納坑埋土地積状況	図版22- 1	21号鐸
図版6- 1	埋納坑と銅鐸出土状況	図版22- 2	21号鐸B面（シカ）
図版6- 2	埋納坑と銅鐸出土状況（31号鐸）	図版23- 1	15（16）号銅鐸
図版7- 1	1号圧痕	図版23- 2	28号鐸
図版7- 2	銅鐸配列状況	図版24- 1	13（14）号鐸
図版8- 1	銅鐸配列状況の復元（1）	図版24- 2	37号鐸
図版8- 2	銅鐸配列状況の復元（2）	図版25- 1	26号鐸
図版9- 1	埋納坑完掘状況（南東から）	図版25- 2	1号鐸
図版9- 2	埋納坑完掘状況（南から）	図版26- 1	18号鐸
図版9- 3	埋納坑完掘状況（東から）	図版26- 2	23号鐸
図版10- 1	入れ子の状態（35（36）号鐸）	図版27- 1	35号鐸
図版10- 2	入れ子の状態（5（6）号鐸）	図版27- 2	18号鐸A面（トンボ）
図版10- 3	6号鐸	図版27- 3	35号鐸B面（トンボ）
図版11	加茂岩倉遺跡出土銅鐸	図版28- 1	35号鐸A面（シカ・四足獸）
図版12- 1	25号鐸	図版28- 2	23号鐸A面（シカ・四足獸）
図版12- 2	17号鐸	図版28- 3	23号鐸B面（シカ・四足獸）
図版13- 1	6号鐸	図版29- 1	8号鐸
図版13- 2	9号鐸	図版29- 2	20号鐸
図版14- 1	22号鐸	図版30- 1	10号鐸
図版14- 2	19号鐸	図版30- 2	29号鐸
図版15- 1	4号鐸	図版31- 1	10号鐸B面鉤（カメ）
図版15- 2	7号鐸	図版31- 2	29号鐸B面鉤（鶴）
図版16- 1	24号鐸	図版32- 1	11号鐸A面鉤（「×」の刻線）
図版16- 2	27号鐸	図版32- 2	遺跡一般公開の風景
図版17- 1	30号鐸		

第1章 調査に至る経緯と経過

加茂岩倉遺跡は、平成8年（1996）10月14日の午前10時頃、加茂町のふるさと農道整備事業大竹岩倉地区農道整備工事の工事中、銅鐸の出土により偶然に発見された。重機作業員が法面工事のため重機を使って丘陵斜面を掘削していた時、重機のバケットの中に土砂と一緒に数個の銅鐸があるのを見つけた⁽¹⁾。正午前、知らせを受けた加茂町教育委員会では職員が現地へ急行し、掘り出された大量の銅鐸とまだ上中に埋まつたままの状態の銅鐸を確認、作業の中止と現状を変更することないよう指示した。

教育委員会では、午後1時前、島根県教育庁文化財課へ銅鐸が発見された旨を連絡するとともに現地に職員の派遣を要請した。県からは勝部文化財課長ほか、文化財課、埋蔵文化財調査センター、古代文化センターの職員が駆けつけ、現地にて対応を協議した。そして、とりあえず日没までに、埋まつたままの状態の銅鐸と遺構を保護するためビニールシートによる仮覆屋を設置。銅鐸の発見状況の聞き取りや写真等により記録し、既に掘り出された銅鐸を現地から搬出する作業を行い、町文化ホールに移送、保管した。なお、出土した銅鐸は町内に保管する適当な施設がないため、10月19日に県埋蔵文化財調査センターに移送した。

掘り出された銅鐸には、工事により大破したものや手が欠損したものもあったが、半分以上は完形であり、大小の銅鐸を入れ子にした状態のものもあった。確認された銅鐸の数は、掘り出された銅鐸が27個、銅鐸発見の際に重機の掘削によりできたバケット坑の北側に鏽を立てた埋納状態の銅鐸が2個、南側には倒れた状態で鏽と鏽の部分を覗かせてて銅鐸2個があり、上中に埋まっている銅鐸は計4個を確認し、総数は31個を数えた。同日午後6時、町文化ホールで緊急の記者発表を行い、この発見は町とマスコミを通じて全国に伝えられた。

翌15日、銅鐸出土地は町と大字名をとって加茂岩倉遺跡と命名、県文化財課の指導、協力を得て、調査開始までの間は、遺跡の保全と調査や見学のための周辺整備に努めた。特に、遺跡の警備には役場職員ほか多くの方の協力を受けて12月末まで24時間体制であった。その間、発掘調査の体制や予算等について県と協議し、10月24日には、文化庁記念物課や奈良国立文化財研究所をはじめ、学会を代表する諸氏に調査指導を依頼して調査指導会を開催した。指導会では、現地遺跡と銅鐸の調査方法等について指導を受け、11月1日から加茂町教育委員会を調査主体として遺跡の発掘調査を行い、一方、出土した銅鐸の調査は島根県教育委員会が県埋蔵文化財調査センターにおいて並行して実施することとした。

発掘調査は、平板測量で遺跡の現状を測量、この地形図をもとに不定形の残丘状に残った地形に沿って任意に調査区設定用の方眼を組み⁽²⁾、11月6日には、銅鐸の埋納範囲を予測するため、金属探知及び電磁探査による青銅器探査を実施した。結果は、確認されている銅鐸以外には、破片等の小さな金属異物の存在が考えられるところはあったが、新たな埋納場所は認められなかった。また、確認されている銅鐸のうち、南側の銅鐸周辺では、金属反応を示す範囲がやや広がりを見せていたが、北側の埋納状態の銅鐸周辺は金属反応が銅鐸部分に限られることから後側に新たな銅鐸が

存在する可能性は低いという探査結果であった。

工事により丘陵斜面は落とされた堆土によって覆われていた。元の丘陵の地形の検出と銅鐸の破片を採取するため、堆土を除去し、振るいにかける作業を行った。12月末までに堆土の約7割方を除去し、破片の数は部位のわかるものから米粒大のものまで百数十点が採取された。なお、坑内外において土器等他の遺物は出土しなかった。遺構周辺の調査では、工事用足場を組んで調査のための覆屋を設置し、まず、バケット坑南側の残丘部分から始めた。11月21日、工事により搅乱を受けた土砂の中から、青銅器探査で金属反応が広がりを見せていましたとおり、入れ子状態の銅鐸1組2個が新たに発見され、また、確認されていた銅鐸2個も各々が入れ子状態とわかり、銅鐸の総数は38個となった⁽³⁾。これら搅乱土中にあった3組6個の銅鐸は翌22日に取り上げた。

工事により搅乱を受けた土を除去していくと、西側や南側の斜面側にはわずかに表土が残存していることがわかった。銅鐸埋納坑の掘り方を検出し、土壤をサンプリングしながら埋納坑内の調査を進めた。埋納坑内に遺されていた銅鐸は、青銅器探査の結果のとおり当初に埋納状態で発見された銅鐸以外には遺存していなかったが、銅鐸の痕跡（圧痕）を3カ所検出した。うち1カ所は5号鐸のものと同定できた。埋納坑周辺は写真測量により図化。銅鐸の保存状態は比較的良好であったが、鰭部などに脆弱な部位が認められたため、アクリル樹脂を塗布し、銅鐸の圧痕も土で乾燥して崩れる懼れがあるためアクリル樹脂の塗布を行った。また、圧痕は配列状況を知る上で貴重な資料であるため型取りを行った。12月21日には、佐原真、春成秀爾、難波洋三氏の指導を受けて銅鐸の配列状況の復元を試みた。12月30日、埋納坑内の銅鐸の取り上げを行い、その際に31号鐸も入れ子であることが判明して銅鐸の総数は39個となった。

年明けからは埋納坑下部の調査を進めた。埋納坑以外の遺構としては土坑1つが検出された。1月17日埋納坑の調査を終え、遺構部分は砂を敷き詰めたうえに土嚢により埋め戻した。堆土部分と土坑の調査及び遺跡の地形測量は平成9年度に実施することとした。

一方、出土した銅鐸の調査は、難波洋三氏の指導を受けて県埋蔵文化財調査センターにおいて10月28日から3月14日までの間調査を行った⁽⁴⁾。工事によって掘り出された銅鐸の配列状況、入れ子の関係を推定するため、銅鐸の外側、内側に付着した土の付着状況を観察、観察を終えたものから順次外側のクリーニングを実施した。調査の結果、入れ子関係、銅鐸の型式・文様、同範関係、絵画や「×」の刻線などが確認された。

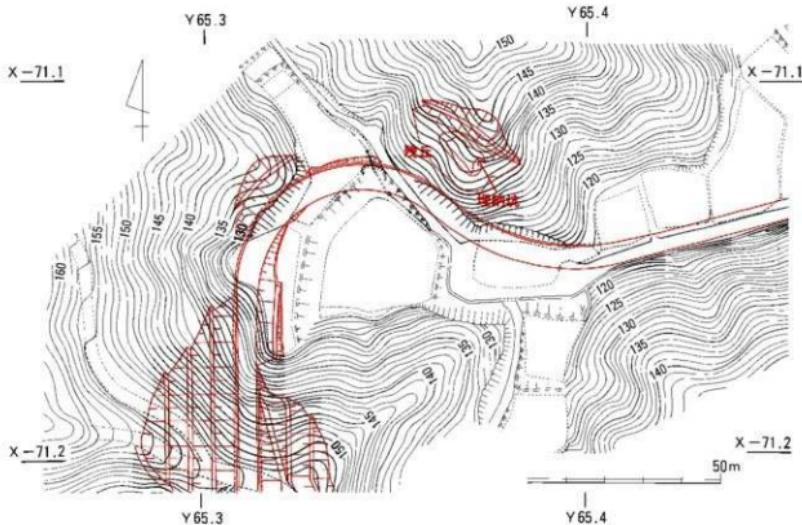
銅鐸は平成9年度開催の古代山陰文化展に出品のため、1月から3月まで奈良国立文化財研究所において仮補強等の保存処置が行われた。詳細な銅鐸の調査は平成9年度以降引き続き実施する予定である。



第1図 斜面の堆土調査風景

註

- (1) 発見者の小田童蔵さんからの聞き取りによれば、この丘陵斜面の掘削は10月10日に着手し、11日には上から5mの最上段の法面ステップを完成させて二段目の法面作業を始めた。掘削した土は斜面下へ落としていた。翌土、日曜日は作業を休み、14日の朝、斜面下の掛上の中にプラスチックのバケツの口のようなものがあると気づいたが、あまり気にとめず掘削作業に入った。そして、10時頃重機のバケットの中に数個の銅鐸が入っているのに気づいて作業を中止、作業をしていた高台から斜面下を覗くと下の水田や道路に多数の銅鐸が転げ落ちていたという。それらを水田の畦に並べて置き、バケットの中の銅鐸は取り出して高台の工事現場の片隅に寄せ置き(図版3-2)、会社に連絡を取った。発見の一報は請負業者を通じて発注元の町農林課へ、正午前に町教育委員会に通報が入った。
- (2) 基準点をS 0-W 0とし、1m間隔で南側にS 1、S 2…、西側にW 1、W 2…と呼称、埋納坑付近は29号鐸の主軸とほぼ重なるS 6-W 3とS 7.5-W 8とを結ぶ線を基準線として調査区を設定した。
- (3) 10月24日の指導会の際、既に取り上げた銅鐸のうちの1個と遺跡にある29号鐸とに各々入れ子があることが判明して総数33個。10月26日には持ち帰っていた銅鐸1個の届け出があり総数は34個になった。
- (4) 銅鐸の番号は個体確認の経緯がまちまちであり便宜的に番号を付した。結果、大きさ、入れ子関係等を反映させるなど整合性をもたせることができなかった。個体番号は、発見当時に現地から採取したものを1~28号鐸、原位置を保つ入れ子の2組4個体を29、30、31、39号鐸、攪乱土中から出土の3組6個体を32、33、35、36、37、38号鐸とした。また、届け出のあった1個については34号鐸とした。なお、入れ子の組み合わせは、例えば2号鐸の中に3号鐸が入っていれば、2(3)と標記し小型鐸を()内書きとした。



第2図 加茂岩倉遺跡周辺の地形 赤は遺跡と農道予定ルート

第2章 位置と歴史的環境

加茂岩倉遺跡は島根県大原郡加茂町大字岩倉字南ヶ廻837-11に所在する。加茂町は斐伊川の支流赤川が東西に流れ、東西6.4km、南北6.8kmとほぼ四角形の四隅を山に囲まれた盆地状の地形を呈する。南北には陰陽を結ぶ国道54号線が走り、赤川と町の中央で交叉する。遺跡は町の中央から国道に沿って北に赤川の支流猪尾川を通り、途中から西へ岩倉本郷の谷を流れる岩倉川を約1.7km入った幅20mほどの狹長な谷の最奥部にある。銅鋒は山頂から少し下がった南向きの丘陵斜面中腹に埋納されていた。標高は約138m、谷底からの比高は約18mあり、見上げるような高さの急な斜面に立地する。出土地からの眺望は良くなく、東方の谷間から隣町の大東町と宍道町境の馬鞍山辺りをわずかに見渡すことができるだけである。谷部は山からの湧水が流れ、水田として使用されている。

町内の主要な遺跡としては、加茂岩倉遺跡から南東1.8kmの赤川南岸に出雲地方最古級の前期古墳として知られる神原神社古墳（加茂町）がある。昭和47年（1972）赤川の河川改修に伴い、神原神社の社殿下にあったこの古墳の発掘調査が行われ、現在は石室のみが移築されている。一辯30mほどの方墳で、割竹形木棺をおいた長さ5.8mの狭長な竪穴式石室を埋葬主体とする。最初三年銘三角縁神獸鏡をはじめ、武器や農工具などの多数の鉄製品が副葬されていた。また、神原神社古墳の背後の丘陵には神原集落を眼下にする神原正面遺跡群（加茂町）がある。尾根上に弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓が密集してつくられ、弥生後期のものとしては、上面に多数の木棺直葬の施設や土壙墓が設けられた径25mの半円形の台状墓や尾根を切断して削り出した方形台状墓があり、中には箱式石棺をもつものもある。古墳はほとんどが徑10m以下の小方墳である。昭和57年（1982）、遺跡のほとんどは公園造成のため発掘調査後消滅した。一方、古代の集落遺跡は現在までのところ発見されていないが、これらの被葬者の居住域は現在の神原集落が立地する赤川沿いの微高地土ではないかと推定されている。

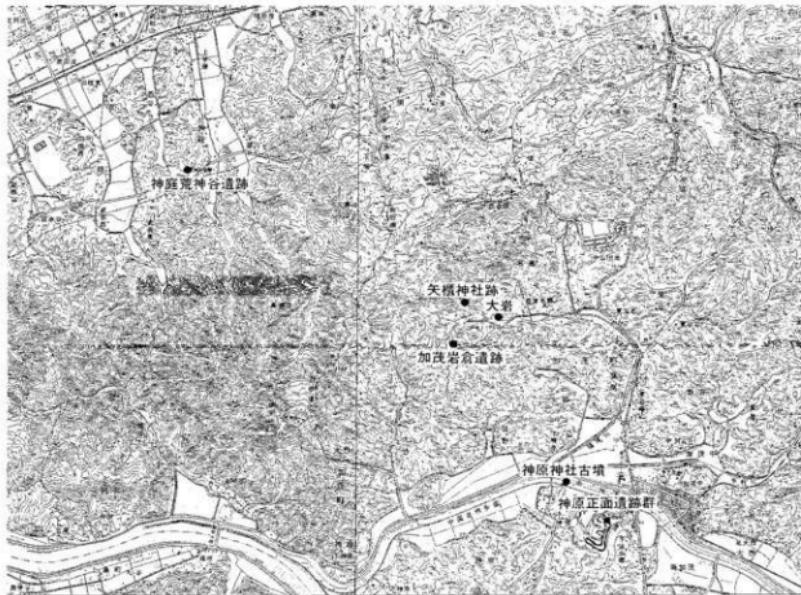
奈良時代の天平5年（733）に編纂された『山雲国風上記』によれば、この辺は大原郡神原郷あるいは屋代郷にあたる。加藤義成氏の比定によれば、岩倉地区は屋代郷に比定され、遺跡は神原郷との境にあたる場所である。神原郷の記述には、「所造天下大神の神御財積み置き給ひし処なれば、神財郷と謂ふべきを、今の人猶誤りで神原郷と云ふのみ」とあり。その地名伝承の記述との関連に興味が持たれる。また、屋代郷は「所造天下大神の祭立てて射たまひし処なり。故、矢代と云ふ」とあり、岩倉の鎮守神の「矢櫃神社」は、矢櫃の神の社の意で「矢代」の矢を掌る神という意味ではないかとされる。岩倉は「磐座」、つまり神が降りてくる岩、神が宿る岩とされるが、矢櫃神社跡地には、磐座を思わせる御神体とされていた大岩があり信仰の対象となっている。また、谷入口の対岸丘陵にも金鶏伝承の謂れをもつ大岩も存在する。地質的にはこの岩倉大山周辺はアンサン岩が分布する一帯でこのような巨岩が点在している。なお、岩倉地区には古墳時代後期の横穴墓、中世の山城跡しか遺跡は知られず遺跡の希薄な地域であった。

次に、弥生時代の出雲地方を概観すると、青銅器出土では、遺跡の北に位置する大黒山、高瀬山からなる山々を挟んでわずか北西3.4kmには神庭荒神谷遺跡（簸川郡斐川町）が所在する。昭和

59年（1984）、これまでの銅劍山上総数を上回る358本の銅劍が神庭西谷の斜面中腹から出土した。銅劍はいずれも中細形C類に属するもので、4列に刃を起こした状態で整然と並べられていた。翌昭和60年（1985）にも、銅劍山上地からわずか東へ7mの地点で、銅鐸6個と銅矛16本が同じ埋納坑から出土した。銅鐸は菱環紐式銅鐸1個と外縁付紐式銅鐸5個、銅矛は中細銅矛2本と中広銅矛14本である。

また、昭和48年（1973）に銅鐸2個と銅劍6本が共伴出土した志谷奥遺跡（八束郡鹿島町）、寛文5年（1665）に命主神社背後の大石の下から銅矛と硬玉製勾玉が出土したと伝えられる真名井遺跡（簸川郡大社町）、その他に出土地は確定できないが伝えられているものとして、平浜八幡宮藏銅劍出土地（推定地：松江市竹矢町）、横田八幡宮藏銅劍出土地（推定地：仁多郡横田町）、伝熊野出土銅鐸（八束郡八雲村）、伝木次町出土銅鐸（大原郡木次町）、伝島根県出土銅鐸（八束郡宍道町、八雲木陣記念財团蔵）が知られる。

弥生時代の集落遺跡は加茂岩倉遺跡と神庭荒神谷遺跡周辺では現在発見されていないが、出雲平野には同時代の集落遺跡が數多く見られる。旧斐伊川と神戸川の堆積作用によってきた川沿いの自然堤防上につくられた集落で、原山遺跡（簸川郡大社町）、矢野遺跡、天神遺跡、古志本郷遺跡（出雲市）などの拠点的な大集落が知られ、弥生後期に大神遺跡や正蓮寺周辺遺跡（出雲市）では環濠を巡らしていたことが明らかになっている。



第3図 加茂岩倉遺跡とその周辺 1:50000

弥生時代後期、西方約9.3kmの斐伊川下流西岸の丘陵上には、弥生後期から古墳前期の西谷墳墓群（出雲市大津町）がある。島根大学により発掘調査が行われた西谷3号墳は弥生時代後期後半の一辺40mを越える四隅突出型埴丘墓で、埴丘斜面に石を貼りつけ、裾には列石を巡らす。埋葬主体は「木棺・木棺」の二重構造を持ち、棺底には朱が一面に敷かれ、第1主体からはガラス製と碧玉製の玉類、第4主体からは鉄剣、ガラス製管玉が副葬されていた。また、墓壇上の供献土器の中には吉備系の特殊土器や北陸系統とも考えられる土器が出土し、吉備地域等との交流関係が注目される。また、古墳時代前期には、出雲平野では、県内最古の前方後円墳とされる大寺古墳や山地古墳（出雲市）が知られ、斐伊川中流域では神原神社古墳の他に前方後方墳の松本1号墳・3号墳（飯石郡三刀屋町）、斐伊中山2号墳（大原郡木次町）が知られている。

（参考文献）

加茂町『加茂町誌』1984

加藤義成『修正出雲國風土紀參究』1981

島根県古代文化センター編『荒神谷遺跡と青銅器』1995

田中義昭・渡辺貞幸ほか『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学考古学研究室 1992

三宅博士・田中義昭『荒神谷遺跡－古代山雲の「土国」を求めて－』1995



第4図 出雲地域の主要遺跡

第3章 調査の概要

1. 発見時の状況

銅鐸発見直後は、丘陵端部を標高136m付近まで掘削され、丘陵尾根筋に当たる部分が8×15m、高さ約2mの不整形な残丘状になつて残されていた(第6図)。現地は全体に二次的に堆積した白色の真砂土に覆われており、掘削が表上と流上を削り、基盤層の真砂土(花崗岩風化層)に達しているようであった。

残丘の南東側中央には、重機が最後に土砂をすくい上げた幅約1.5mの窪み(バケット坑)ができていた(第5図)。そのバケット坑北側断面には、柄を向かい合わせた銅鐸が2個、東側にやや離れて、柄を欠いた銅鐸平面の圧痕1カ所が残されていた(図版3-1)。これらは、重機バケットにより埋納坑が垂直に切られて埋納坑断面が露出しているものとみられた。断面下側には基盤層の真砂土がみられ、埋納坑底面のラインが確認でき、銅鐸・圧痕周辺の土は残丘上面を覆っている真砂土とは異なり、埋土とみられた。そして、銅鐸と圧痕はほぼ同一レベルに躋を立てて並んでいる点で共通し、原位置を保っていると考えられた。バケット坑南側には、銅鐸の躋(35号鐸)と柄(32号鐸)の部分が露出していたが、想定できる鐸の軸線とその傾きに規則性がないえ相互の高低差もあったため埋納状況を反映しているとは考えられなかった(図版4-1)。



第5図 発見時の状況

2. 青銅器探査

銅鐸の埋納範囲の確認と確認されている銅鐸周辺以外に金属異物が存在しないかどうかの基礎的な資料を得ることを目的に、金属探知器、および電磁探査器(浅部電磁探査装置EM-38[Geonics社製])による青銅器探査を実施した(第6図)。探査は奈良国立文化財研究所西村康宰長の指導を得、神庭荒神谷遺跡他これまでに全国各地の遺跡で埋蔵文化財探査の実績をもつ応用地質科に委託して行った。探査範囲は銅鐸出土土地周辺約9×15mの範囲で、範囲全体を1m格子、銅鐸の近傍を25cm格子の測点を設定した。結果は次のとおりで、

- ①探査時点で確認されている銅鐸について、金属探知および電磁探査器によって金属反応が得られた。
- ②バケット坑北側の埋納状態の銅鐸2個の周辺(測点S 7-W 6付近)では、金属反応を示す範囲が全般的に銅鐸周辺に限られる。よって、確認されている銅鐸の後側にさらに新たな銅鐸が存在する可能性は低い。
- ③バケット坑南側の倒れた状態の銅鐸2個の周辺(測点S 9-W 5付近)では、金属反応を示す範囲が②の埋納状態の銅鐸周辺に比べてやや広がりを見せており、銅鐸分布の広がる可能性を考えられる。ただし、埋納状態の銅鐸に比べて銅鐸が倒れていることの影響により金属反応がやや広

めになるとも考えられる。

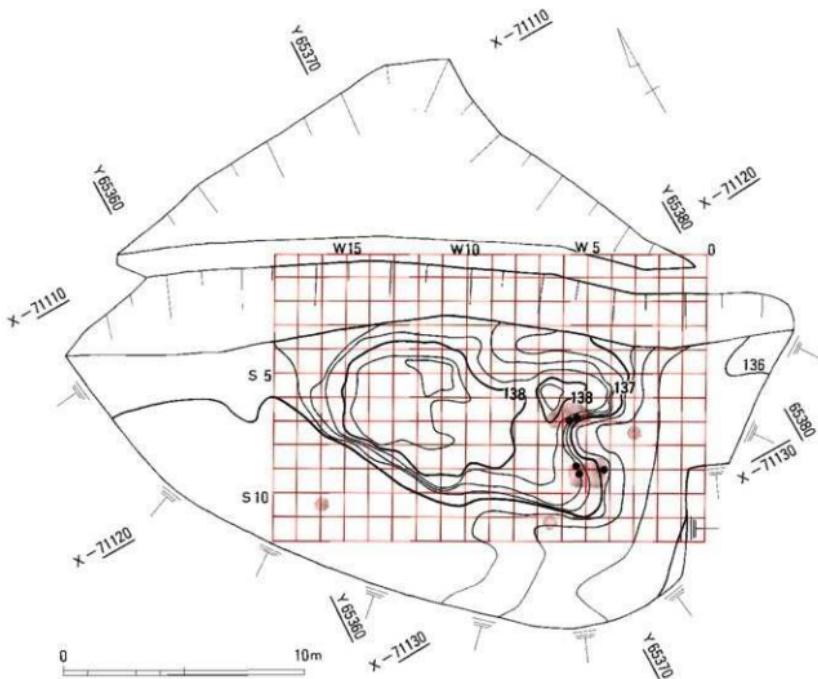
④その他、周辺の計3ヶ所で金属反応が認められ、小さな金属異物（銅鐸ならば小破片）の存在する可能性が考えられる。

以上の結果から、確認されている銅鐸の他に、新たな銅鐸が埋納されている範囲が存在する可能性は低いものと考えられた。

3. 埋納坑の調査

先述したとおり農道工事により埋納坑の大半は失われており、その本来の形状、規模を推定するにはかなり困難が伴うものと思われた。調査は、まず工事によって攪乱された土砂を除去し、重機掘削を免れた本来の面を露出させ、埋納坑の輪郭を検出、坑内の土層観察後鐸を取り上げ、さらに坑の下部の確認の順で行うこととした。

埋納坑調査に先立ちバケット坑南側の遺存状況の確認をおこなった。土層観察のベルトを残し掘



第6図 銅鐸出土地点と地形測量図

方印は調査用グリッド、黒点は銅鐸検出位置、
■かけ部は金属探知器による金属反応箇所。

り下げたところ、残丘頂に向かってスロープ状に立ち上がる地山面の上に貞砂土や粘質土ブロックが二次的に斜面堆積していることがわかった。この攪乱土中からは入れ子鋼鉄3組6個体と、鉄の圧痕をとどめる坑内埋土ブロック若干が出土した。攪乱土を除去すると残丘の上から重機が掘削した状況が明瞭に現れ、改変前の原地形が全く失われていることがわかった（図版4-1・2）。

（1）埋納坑

立地

埋納坑は南に張り出す急峻な尾根の先端に近い南東斜面に立地している（第2図）。工事前の地形図を見ると埋納坑付近は標高136m～139m付近にわたって傾斜が緩やかになっており、立木伐採後の写真（図版2-1）によても緩斜面の存在がおおよそ確認できる。埋納坑の西側では地山の花崗岩風化土を削平した平坦面が作り出されていたことから、工事前の原地形にある程度それが反映していたものと思われる。ただし、残丘上を完掘していないので平坦面の広がりは今のところ不明である。

規模・形状

埋納坑はおそらく矩形を呈していたと思われるが、坑の北辺と西辺の一部しか遺存していなかったので、全体の規模及び壁の長、短辺の別を確定する所見は得られなかった。残存する北および西辺の長さは坑底面でそれぞれ1.81m、0.8m、坑上面で1.75m、0.5mであった。坑は基盤層の柔らかい花崗岩風化土（貞砂土）を掘り込んでおり、底面は凹凸が著しい。深さは北西隅で最深0.41m、工事による削平を免れた2、3号圧痕付近で約0.3mを測る。工事の改変や原地形を考慮しても全体として浅い坑が想定される。

坑の特徴

埋納坑の掘削で特徴的のは壁面をオーバーハングさせて掘っている点である。坑壁下端付近の埋土中に壁面が剥落したような地山ブロックの堆積が見られなかったことから、意識的な掘削方法と判断した（図版9）。

北辺の横断面を見ると東側の1号圧痕付近では袋状を呈し、壁面には左下がりの掘削痕が認められ、袋状の壁と凹凸の著しい坑底面との境は不明瞭であった（第9図 g-h・i-j）。一方、西側の29号鉄付近では直線的に内傾し、掘削痕は不明瞭で底面との境界も比較的判別し易かった（第9図 e-f）。この相違は29号鉄と1号圧痕の中間点付近を境にしているが、埋土に掘り返した形跡が認められなかったので壁面の様相の違いは坑壁の掘削整形の処理の差と考えられる。掘削工程に先後関係を想定するなら、直線的に内傾する壁面をさらに拡張した結果、壁と底面の処理に相違が生じた可能性もある。ただし拡張以前の埋納坑プランを推測する手がかりは得られなかったので、その修正の程度やその必要性について明らかにできていない。

西壁の遺存状態は必ずしも良くなかったが、坑の北西隅から2号圧痕にかけて壁面はオーバーハングしていた。特筆すべき点は、内傾する壁面からさらに0.2m横掘りした砲弾状の穴が掘られ、ここに31号鉄が納められていたことである（図版6-2）。坑底面には当初の壁面の下端と思われる段差が僅かに残っていたことから、西壁の掘削の後31号鉄の配置段階に拡張した可能性がある。

3号圧痕部分では壁の上半を欠き、それより南側の状況も不明である。坑の四周で壁がオーバーハンピングしていたかどうかは不明であるが、遺存部分が丘陵上方寄りであることを考慮すれば、壁面の内傾は山側のみの特徴であった可能性もある。

(2) 銅鐸の埋納及び埋土

配列

坑内には原位置を保つ入れ子状態の銅鐸2組4個〔29(30)号鐸、31(39)号鐸〕と埋納の痕跡をとどめる鐸の圧痕3ヶ所が残っていた(第8図 図版6-1)。鉢を西に向ける31号鐸と鉢を東に向ける29号鐸は互いに裾を接して向かい合わせて置かれていた。両鐸の長軸は北側壁とほぼ平行し、壁との約0.3mの間に銅鐸の埋納を想わせる痕跡は見あたらなかった。31号鐸の南側の坑壁に接して裾の圧痕が2ヶ所あり(北から2号、3号圧痕)2つとも鉢を東に向けていたことが判った。1号圧痕は29号鐸から東に0.65mの位置にあり、鉢を北側壁に斜行させるように向けていた。29号鐸と1号圧痕の間に鐸を埋納した痕跡は確認できなかった。

銅鐸・圧痕検出状況

29号鐸は鉢に顔を鋤出した六区袈裟襷文銅鐸で、上方に向く鰭及び鉢の一部は工事掘削により破損していた。鉢をS-80°-Eに向け、顔の付くB面を南にし、僅かに北に傾くもののほぼ垂直に鰭を立てていた。また上方の鰭側縁を水平にし、下に向く鰭下端を支点として鉢を起こすよう置かれていた。一見不安定とも思える体勢だが、鰭下端から鉢に向かって盛り上げた丸層が鐸下面を支撑していることから、意図的に据えたものと判断した。29号の入れ子は四区袈裟襷文の30号鐸で、鰭を北に倒した状態で内包されていた。

31号鐸は二区流水文で、鉢をN-70°-Wに向け、菱環に「×」の刻線のあるB面を北にし、鰭は北側に約45°傾け下面をほぼ水平にして置かれていた。先述した狭い横掘り穴に鉢を押し込むようになめられていた。横穴の大きさからすると31号鐸は当初から鰭を傾けた状態で埋納されたと考えられる。埋納状況を平面的に見ると、鉢から身の型持孔までが横掘り穴に納まり全体では鐸上半部が埋納坑壁に隠れていたことになる。入れ子の39号鐸は四区袈裟襷文で、鰭を北に倒した状態で内包されていた。

1号圧痕は重機掘削の直後鐸が抜け落ちたものである。鐸身半面の大半を良好に残し、表面には緑青が付着していた。工事の掘削が上方の鰭側縁まで及んでおり端部には破片が残っていた。鐸身



第7図 1号圧痕の同定調査

に当たる凹面には部分的に流水文の条線も認められ、菱環の隆起部分も明瞭であった(図版7-1)。個体の同定は圧痕の計測値、流水文の特徴、破損の状態を手がかりに候補の鐸を選び、さらに圧痕の拓本を取り流水文の比較検討を経て最終的には候補の2鐸を圧痕に当て、5号鐸と確定した(第7図)。圧痕から復元できる5号鐸の埋置状況は鉢をN-33°

-Wに向け、菱環に「×」の刻線のあるB面を北側壁に向かって、鎧を北に約40°傾けていた。上方の鎧側縁は水平で29号鐸のそれとレベルがほぼ揃うが、鐸の大きさと鎧の傾きを考慮しても坑底面には接地してはいなかったようである。5号鐸の表面を見るとA面鐸身の左側に砂礫をまじえた濃緑色の鎧が固着している(図版21-2)。鐸を原位置に戻してみるとこの部分が西側に最も張り出す位置に当たることから、5号鐸の隣にあった銅鐸が並列し互いに身を接する位置関係にあった可能性がある。5号鐸は入れ子状態のまま掘り出されており、内包する6号鐸は四区袈裟襷文で鎧を北に倒して納められていた。

2号圧痕は鎧下端から裾の痕跡をとどめ、これに対応する反対面の裾下端部の鎧も壁面に遺っていた。鎧から裾下端の圧痕が坑壁にくい込むように遺存していたことから、裾を坑壁に押しつけるように鐸を置いたことがわかる。圧痕面の北端は31号の鐸身に達しており、この部分に鐸の本体を覆う鎧とは異なる濃青色の鎧が固着していたことからも2号圧痕を遺した銅鐸は31号鐸と身を接して置かれていたようである。圧痕表面には粉状の鎧が付着していたが、下辺横帯の文様等は確認できず、個体の同定はできていない。

2号圧痕の南側に鎧下端から裾の痕跡をとどめる3号圧痕が遺存していた。対応する反対面の裾の痕跡は工事掘削により失われていたが、鎧下端が坑壁にくい込むように遺っていたことから、この鐸も坑壁に裾を押しつけて据えられたようである。また、2号圧痕との位置関係から互いに身を接して置かれていたようである。表面には鎧が付着していたが、遺存範囲が狭く個体を同定する手がかりは得られなかった。

埋土

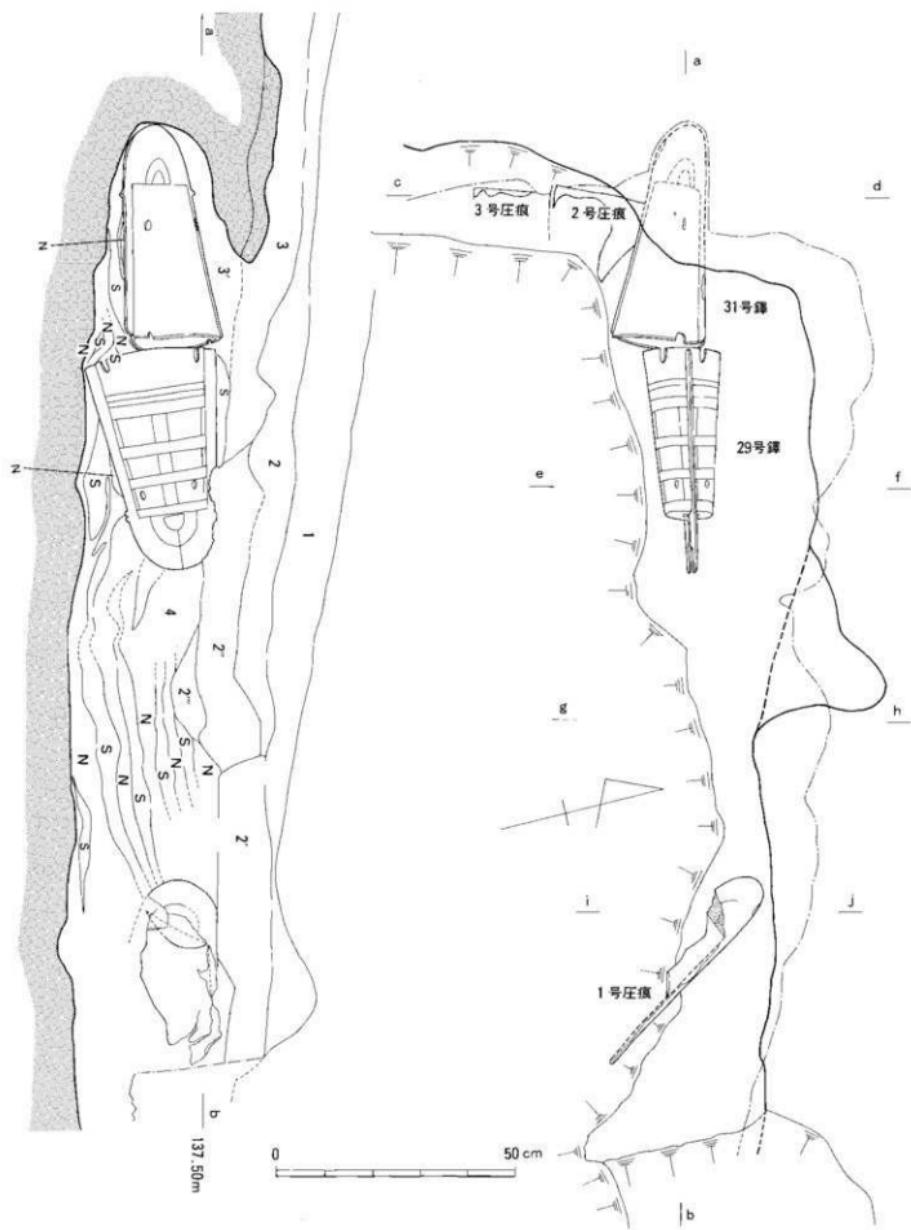
坑内埋土には2次的な掘り返しや銅鐸を被覆する構造物等の痕跡は認められず、暗褐色粘質土と黄褐色砂質土が互層状に堆積していた(第8図 図版5-1)。ともに丘陵周辺で見られる土と同質であったが、意図的に使い分けたと考えられる。

29、31号鐸の上方では坑外の平坦面からびる茶褐色粘質土が埋納坑掘り方と坑内埋土を覆っていた。平坦面上のこの上中から炭化物が若干出土したが散発的な分布を示し、焼上は確認できなかった。

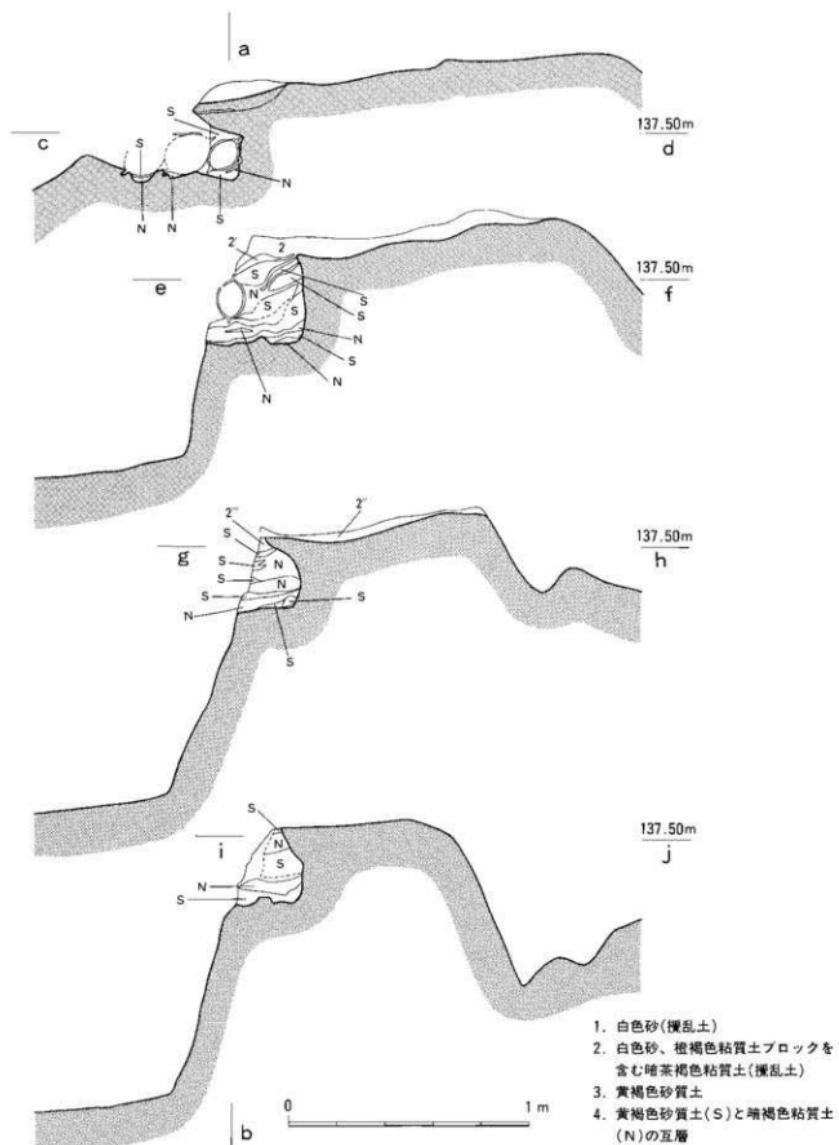
坑内埋土の互層状堆積は全体として坑壁から鐸に向かって下方傾斜しているが、場所によってその様相は異なる。31号鐸と1号圧痕付近では、粘質土・砂質土とも厚みをもち比較的単純な堆積を示していた(第9図 c-d・i-j)。29号鐸周囲を見ると鐸の下面で水平に堆積し、それより上方では坑壁から伸びる薄い粘質土が鐸側面を支えるように厚みを持って終わっている(同e-f 図版5-2)。互層の数も31号鐸、1号圧痕周囲より多く、2鐸に比べ29号鐸がより丁寧に埋設されたことが窺えた。坑内を調査した限り29、31、5号鐸を置くため共通する据え付け面ではなく、少なくともこの3鐸は坑の完成後順次埋納されたようである。

(3) その他の遺構

埋納坑の西約3mの地点で土坑が確認されたが、限られた範囲しか調査できなかつたので構造の詳細及び性格・時期等については現段階では不明である。これ以外にも未掘部分が残されているので埋納坑とその周辺状況については今後の調査の進展を待つてあらためて検討したい。



第8図 埋納坑実測図



第9図 埋納坑土層図

第4章 出土銅鐸の概要

京都国立博物館 難波洋三

型式構成

加茂岩倉遺跡出土銅鐸のほとんどは、II-1・2式（外縁付鉗1・2式⁽¹⁾）かIII-2式（扁平鉗式新段階）のようであるが、七が付着していたり、入れ子のままになっているため型式を確定できないものがまだ何個もある。また、クリーニング作業がかなり進行している個体の中にも、型式を確定できていないものがある。たとえば、15・28号鐸はII-2式かIII-1式（扁平鉗式古段階）か、18・23・35号鐸はIII-2式かIV-1式（突線鉗1式）か、微妙である。

現在確認できている身の主文様は、流水文、四区袈裟棒文、六区袈裟棒文のいずれかで、II-1式は四区袈裟棒文、II-2～III-1式はほとんどが流水文で一部が四区袈裟棒文、III-2～IV-1式は四区袈裟棒文と六区袈裟棒文である。

大きさ

I-2式からIII-2式までの銅鐸は、各型式にそれぞれ大小いくつかのサイズのものがあるにもかかわらず、加茂岩倉遺跡山上銅鐸は、型式ごとに大きさがそろっている。すなわち、II-1式は全高約30cmの小型しかなく、II-2～III-1式とIII-2～IV-1式は全高約45cmの大型しかない⁽²⁾（図版11）。そして、加茂岩倉遺跡の北西約3.4kmに位置する神庭荒神谷遺跡から出土した6個の銅鐸は、いずれも全高約20cmと、加茂岩倉遺跡出土の小型銅鐸よりさらに小型である。また、大型のII-2～III-1式とIII-2～IV-1式を比較すると、II-2～III-1式よりもIII-2～IV-1式がやや大きい。

埋納状態

加茂岩倉遺跡出土銅鐸のほとんどは、工事によって原位置から移動した状態で発見された。しかし、付着した土や鉄の状態の部分的な差異を検討した結果、これらの銅鐸も現場に残っていた2組の銅鐸と同様、いずれも身を横たえて左右の鐸を上と下あるいは斜め上と斜め下にして埋納されていたと推定できた。

また、銅鐸の多くは、大型銅鐸の身の中に小型銅鐸を入れた、いわゆる入れ子の状態で発見された（図版10-1・2）。入れ子の大小の銅鐸の組み合せが判明しているのは、2(3)号鐸⁽³⁾、5(6)号鐸、8(9)号鐸、11(12)号鐸、13(14)号鐸、15(16)号鐸、18(19)号鐸、29(30)号鐸、32(33)号鐸、35(36)号鐸、37(38)号鐸、31(39)号鐸、以上12組である。そのほか、七や鉄の付着状況などから、1(4)号鐸、26(27)号鐸、28(7)号鐸、以上の3組も入れ子であったと推定できた。

大型銅鐸のうち10・20・21・23・34号鐸の5個については、組み合う小型銅鐸が明確でないが、10・20・34号鐸の3個は入っていた小型銅鐸の鐸の圧痕が身の内面に残っているので、これらも本来は入れ子になっていたことがわかる。すなわち、現状で入れ子になっていたかどうかを確認でき

ていないのは、大型銅鐸では21・23号鐸の2個だけである。この2個についても、身の中は空洞になっており土が詰っていないので、小型銅鐸が入っていた可能性は充分ある。

一方、小型銅鐸で入れ子関係が確認できていないのは、17・22・24・25号鐸の4個であるが、いずれも完形で欠損がない。その多くは、大型銅鐸の身の中に入っていたために保護され、発見時に作業用機械でこわされることがなかったのであろう。この点からも、銅鐸はほぼすべて入れ子になっていたと推定できる⁽⁴⁾。

入れ子になったままで発見された銅鐸をみると、小型銅鐸は下になった鋸を大型銅鐸の内面に接し、もたれかかった状態になっていたことがわかる。大型銅鐸の内面や小型銅鐸の外表面に付着していた土は、肉眼観察では土坑の埋土と異なる。入れ子になった大小の銅鐸の間の上は、大型銅鐸の身の下縁から内面穴帯付近まではびっしりと詰っているが奥ほど量が減り、舞近くには空洞が残る場合が多い（図版10-3）。また、小型銅鐸には、6・33・38号鐸のように、上面側には粗砂を多く含んだ方が比較的厚く付着しているのに対し、下面側には埋土から漉し出された粘土が薄く付着しているにすぎない例がある。これらの状況から、空洞になった入れ子の銅鐸の中へ埋納の際に埋土が入り込み、その後も徐々に土砂が流入したことが推定できる。今後予定されている土砂の堆積構造の分析などによって、この点はより明確になるであろう。

なお、原位置から移動した状態で発見された銅鐸が本米は埋納坑内のどこにあったのか、また、約20組の入れ子の銅鐸が全体としてどのように配列されていたのかを、土や鋸の状態から復元することは、今のところ難しい。

付着物など

現在までの調査では、銅鐸を舟などで包んだりなんらかの容器に納めたりした痕跡は、確認されていない。

10号鐸の鋸の凹部には赤色の顔料がわずかに付着して残っていたが、奈良国立文化財研究所での分析の結果、これが水銀朱であることが判明した⁽⁵⁾。

同范銅鐸

現在、加茂岩倉遺跡出土の39個の銅鐸のうち15個8組は、同范関係にある銅鐸の存在が判明しており、クリーニングが進めばこのような例はさらに増えると予想される。また、2・15号鐸（図版19-1・23-1）は、同范関係にある銅鐸がまだ明確でないが、使用した鋳型に顕著なひび割れや欠損があったことがわかるので、同じ鋳型を使って別の銅鐸が先に鋳造された可能性が高い。

次に、これらの同范銅鐸の製作順について、現段階での観察結果を記す。

4・7・19・22号鐸（図版14・15）は、和歌山県太田黒田鐸と同范である。鋸に残る疤痕の進行の状況から、22号鐸→19号鐸→太田黒田鐸・4号鐸→7号鐸の順に製作されたと推定している。太田黒田鐸と4号鐸の鋳造の先后は、今のところ明確でない。

5号鐸（図版21-2）は、兵庫県氣比2号鐸と同范である。B面の下辺横帯上界線と流水文条線の間にみられるいくつかの鋳型の欠損やA面下区の流水文条線の間の鋳型の欠損が、兵庫県氣比2号鐸にはあるが5号鐸にはないので、5号鐸が先に鋳造されたのであろう。

31・32・34号鐸（図版20・21-1）は、兵庫県桜ヶ丘3号鐸、鳥取県上屋敷鐸と同范である。桜ヶ丘3号鐸は、32・34号鐸・上屋敷鐸より范傷の進行が顕著で、この3個より後に鋳造されたようである。クリーニングの進んでいない31号鐸の位置付けは、明確でない。

17号鐸（図版12-2）は、奈良県上牧鐸と同范である。A面の鉢の范傷からみて、17号鐸が先に鋳造されたのであろう。

21号鐸（図版22）は、伝大阪府陶器出土鐸、兵庫県氣比4号鐸、伝福井県井向出土鐸と同范である。井向出土鐸を除く3個の中では、伝陶器出土鐸が他の2個より先に鋳造されたようである。

加茂岩倉遺跡出土の8組の同范銅鐸のうち、7組はII式で石製鉄型を使って作られたと考えられるが、1組（1・26号鐸）はIII-2式であり、土製鉄型を使って作られたと推定できる（図版25）。土製鉄型で作られたと考えられる同范銅鐸は、これまで1組（奈良県石上2号鐸と出土地不明辰馬406号鐸）しか知られておらず⁽⁶⁾、本例が2組目である。1号鐸と26号鐸を比較すると、鉢下部および縁上部から身上部の縫付近のかなり広い範囲にわたって文様の不一致がみられ、破損の顯著な鉄型を補修して同范品を作った様子がうかがえる。また、26号鐸では片面の鉢内縁に鋤出された鋸歯文が完全だが、1号鐸では内縁の作り替えにより頂部が欠けて不完全になっている点、26号鐸ではA面左縁の鋸歯文の配列に乱れないが、これに対応する1号鐸B面の左縫括歯文は、一部が不自然に重なりっている点、さらに、1号鐸A面の第1横帯中央の范傷と中縦帯から下辺横帯にかけての范傷が26号鐸では顕著でない点などから、26号鐸→1号鐸の順に作られたと考えられる。そして、26号鐸の両面の左右縦帯の上部および第1横帯の左右端にも、製品をばずした際に生じたと考えられる鉄型の破損を補修した痕がみられるので、26号鐸にさらに先立って鋳造された銅鐸が存在した可能性が高い⁽⁷⁾。すなわち、この例では、土製鉄型を使って同范銅鐸が3個以上鋳造されたと推定できる。

II～III-1式の型式的位置付け

流水文銅鐸は9個出土している。そのうち6個はII-2式である（図版19-2～22）。残る3個のうち、2号鐸（図版19-1）は3号鐸が入れ子になったままであるため、II-1式かII-2式か明確でないが、鉢の文様帶構成はII-2式に近い。また、前記のように15号鐸と28号鐸（図版23）は、II-2式かIII-1式か確定できていない。ただし、この2個は、II式の流水文銅鐸と同様に、横帯で分割した複数の区画に流水文を飾る点で、全面一区画流水文になった典型的なIII-1式流水文銅鐸よりは古い特徴を有するので、III-1式になるとしても、その古い段階に属するであろう⁽⁸⁾。

II-2式の流水文銅鐸には、2つの系列がある⁽⁹⁾。ひとつは、複合縦型流水文を身に飾る「縦型流水文銅鐸」で、大阪府茨木市東奈良遺跡から鉄型がまとまって出土しており、ここを拠点として活動していた工人集団の製品と考えられる。もうひとつは、畿内南部（河内南部・大和・和泉）の中期初頭の土器に飾られていた横型流水文を銅鐸の身の画面に適した形に改変して飾る「横型流水文銅鐸」である。横型流水文銅鐸は、鉄型がまだ出土していないが、流水文に畿内南部の土器流水文の特徴を強く残していることから、この地域に拠点を置いた工人集団の製品と考えられる。加茂岩倉遺跡出土の9個の流水文銅鐸は、すべて横型流水文銅鐸の系列に属し、縦型流水文銅鐸は含

まれていない。この時期、加茂岩倉遺跡出土の銅鐸を集めた集団は、銅鐸のほとんどをこの工人集団から入手していたようである。

小型の銅鐸には、クリーニングがなされていないものが多いので、まだ同範関係や文様構成などについて不明な点が多いが、畿内とその周辺でこれまで出土しているII-1式と大きく異なる特徴を有する個体は含まれていないようである。また、前記のように加茂岩倉遺跡出土のII-2～III-1式のほとんどが畿内の工人集団によって作られたと推定できる事も考えれば、これより製作年代の古いII-1式の多くは、畿内の工人集団の製品とできよう。

なお、加茂岩倉遺跡山十のII-2～III-1式銅鐸には、流水文銅鐸以外に四区袈裟樽文銅鐸が2個ある。そのうち、37号鐸（図版24-2）は、鱗の鋸歯文が下辺横帯の下界線に対応する位置までしかなく、B面の袈裟樽文の縦横帯内に網代文あるいは複合鋸歯文が飾られている点で特異である。また、13号鐸（図版24-1）は袈裟樽文の界線が複線で、その一部は綾杉文になっている。

III-2～IV-1式の型式的位置付け

III-2～IV-1式には、四区袈裟樽文銅鐸と六区袈裟樽文銅鐸がある。その中で製作地の問題などに関係して最も注目されるのは、四区袈裟樽文銅鐸で身の上にシカ・トンボなどの絵画を鋳出し下部に四頭渦文を鋳出す、18・23・35号鐸（図版26～28）である。同じ工人集団の製品と考えられるこの3個は、下辺横帯の下界線が他の界線や文様の線よりやや太くなっている。前記のようにIII-2式かIV-1式か微妙であるが、同時期の畿内系の銅鐸にはあまりない、次のような特徴を有している。

①袈裟樽文の縦横帯界線が切り合っている。

②縦横帯界線で区切られた袈裟樽文の各部分に斜格子文を充填するにあたっては、任意の部分を統一して描いており、横帯優先になっていない。

③この斜格子文が上部ほど密で下部ほど粗になっている。

④縦帯の幅が上で狭く下で広くなっている。その差が大きい。

⑤外縁第1文様帯の幅が鉢頂で広く舞近くで狭くなっている。その差が大きい。

⑥外縁第2文様帯に頂角を外に向かって鋸歯文を飾る。

⑦身の上半の型持が小さい。

⑧23・35号鐸は、袈裟樽文の縦横帯界線は単線だが下辺横帯の上の界線が複線である。

⑨23・35号鐸は、鱗鋸歯文の下端の平行条線が鱗の下端よりかなり上にある。

⑩23・35号鐸は、下辺横帯にL R鋸歯文を飾る。

現段階で加茂岩倉遺跡山十銅鐸のうち、山雲あるいはその周辺で作られた可能性が最も高い銅鐸をあげるとすれば、この銅鐸群3個となろう⁽³⁰⁾。

これに対し、これら3個と同じ四区袈裟樽文銅鐸で、III-2式にあたり製作年代もそれほど違わない1・26号鐸（図版25）には、同時期の畿内系の銅鐸と異なる特徴はあまり目立たない。しかし、III-2式にはほとんど例のない鱗に飾耳が1対ありかつ全高45cmを越える大型の四区袈裟樽文銅鐸である点、内面突帯が2条の点、飾耳に綾杉文を飾る点、身の上半の型持孔が通常と異なり上区

の下位にある点⁽¹⁾などで前記の18・23・35号鐸と共に通しておる、その祖型の可能性がある。

III-2式六区袈裟樽文銅鐸は4個が出土しており（図版29～31）、次のような特徴がみられる。

①鰐に1対の飾耳を有する。

②飾耳の縁が幅広い斜面になっている。

③身の下半の型持が縦に細長い。

④III-2式六区袈裟樽文銅鐸のほとんどは全高が約40～43cmで、全高約50～65cmの例も少数ある。

加茂岩倉遺跡出土の4個はいずれも全高約46cmと、通常のIII-2式六区袈裟樽文銅鐸よりひとまわり大きく、類例のほとんどない大きさである。

⑤III-2式六区袈裟樽文銅鐸の中では、柄の上下幅が広い。8・29号鐸は、特にこれが広い。

⑥III-2式六区袈裟樽文銅鐸の中では、菱環文様帶の幅が広い。8・29号鐸は、特にこれが広い。

⑦8・10・29号鐸は、菱環文様帶の幅が鉗頭で広く舞近くで狭くなっている、その差が大きい。

⑧10・20・29号鐸は、鉗孔が小さい。

III-2式六区袈裟樽文銅鐸には、鰐に飾耳がないもの、1対あるもの、3対あるもの、の区別がある。そのうち鰐に飾耳が1対ある例の数は、加茂岩倉遺跡出土の4個を含めてIII-2式六区袈裟樽文銅鐸の総数の2割に満たないにもかかわらず、①に記したように加茂岩倉遺跡出土のIII-2式六区袈裟樽文銅鐸は4個とも1対耳である。さらに、②～⑧の特徴の多くが他のIII-2式六区袈裟樽文銅鐸にはほとんどみられないことを考え合わせれば、8・10・20・29号鐸の4個は単独の工人集団あるいは緊密な関係にある少數の工人集団の製品の可能性が考えられる。

なお、前記の②と③の特徴については、これを有する例が畿内系の六区袈裟樽文銅鐸には他にならないが四区袈裟樽文銅鐸には多いので、四区袈裟樽文銅鐸から導入されたと考えられる。また、全高が46cm前後の例は、④に記したようにIII-2式の六区袈裟樽文銅鐸にはほとんどないが、同時期の四区袈裟樽文銅鐸の渦森型・長者原型には多く中芳養型にもあり、加茂岩倉遺跡出土のIII-2～IV-1式四区袈裟樽文銅鐸の1・26・18・23・35号鐸の全高も、やはり46cm前後である。この全高が46cm前後である点も、これらの四区袈裟樽文銅鐸との関係で説明できるかもしれない⁽²⁾。このように、加茂岩倉遺跡出土の4個のIII-2式六区袈裟樽文銅鐸には、四区袈裟樽文銅鐸の影響が強くみられる。

この4個の中でも8号鐸（図版29-1）は、菱環文様帶の舞に接する部位に平行条線を飾らない、下辺横帯下界線が3条である、R鋸齒文とし鋸齒文を混用する、鉗下端に条線がない、鉗孔が比較的大きいなど、古い特徴を最も多く有しており、かつ、大半のIII-2式六区袈裟樽文銅鐸が有する菱環文様帶の稜の線や鉗頭の線がない点や、柄の上下幅がこの型式としては異常に広い点など、他の3個にも増して四区袈裟樽文銅鐸との関係が強い。⑥⑦に記したように、8号鐸は29号鐸とともに、鉗の菱環文様帶の幅が、際立って広くかつ鉗頭で広くて舞近くで狭くなっている特徴が顯著であるが、類例のほとんどないこの特徴が1・26号鐸（図版25）にもみられる点は重要である。今後さらに検討する必要があるが、8号鐸と1・26号鐸は同じ工人集団の製品かもしれない。

これらのIII-2式六区袈裟樽文銅鐸には、特異な文様や絵画を有する例がある。10号鐸（図版30-

1) は、両面の第4横帯と巾縞帯の交差部には重画文を、B面鉢外縁が舞に接する部位には重弧文を飾り、この面の下辺横帯には銅歛文と重弧文を併用する。また、B面鉢内縁にはカメの絵を鋳出している(図版31-1)。このカメの絵は、甲が中に綾杉文を入れた二重の円として表現されている点で、桜ヶ丘4・5号鐸型のカメの絵と共通している。銅鐸自体の製作年代はⅢ-2式六区袈裟襷文銅鐸の祖型である桜ヶ丘4・5号鐸型のほうが古いで、10号鐸のカメの絵はその影響を直接あるいは間接的に受けたと推定できる。また、29号鐸B面の鉢外縁の頂部には、顔が鋳出されている(図版31-2)。頬に入れ墨か麗のような弧線があり、口には黒口があらわされていない。

「×」の刻線

鋳造後に「×」を刻した青銅製祭器が、近接する加茂岩倉遺跡と神庭荒神谷遺跡のみで出土していることは、山道跡の関係を考える上で重要である。神庭荒神谷遺跡出土の銅劍のほとんどには、この刻線がある。加茂岩倉遺跡出土銅鐸では、3月14日現在、Ⅱ-1式の22号鐸、Ⅱ-2～Ⅲ-1式の5・11・13・28・31・32号鐸、Ⅲ-2～Ⅳ-1式の1・18・23・26・35号鐸、以上の12個に「×」の刻線がみつかっているが、いずれも片面の鉢菱環文様帶の頂部に刻されている(図版32-1)。「×」の刻線に関して現段階で注目される点は、Ⅲ-2～Ⅳ-1式のうち、四区袈裟襷文銅鐸は5個すべてに「×」が刻されているが、4個ある六区袈裟襷文銅鐸には刻されていないこと、互いに同範の銅鐸でも「×」を刻する例と刻さない例があることなどである。

今後、「×」の形状、2本の線の切り合い関係、線を刻んだ工具の刃部の特徴、線刻技法の特徴や癖などを検討する予定であるが、同一工人がⅡ式とⅢ-2～Ⅳ-1式の双方に「×」を刻んだ事を確認できる例があれば、加茂岩倉遺跡出土銅鐸の「×」はⅢ-2式の成立以降、おそらく埋納にそれほど先立たない頃に刻された可能性が高くなる。また、荒神谷遺跡出土銅劍に刻された「×」との同様の比較検討も、これから調査課題である⁽¹³⁾。

加茂岩倉遺跡と神庭荒神谷遺跡から出土した青銅製祭器に限って「×」を刻した例があることからは、山道跡の青銅製祭器の少なくとも一部が、埋納までのある時期、同じ集団の管理下にあったとも考えうる。これに関連して注目されるのは、神庭荒神谷遺跡出土の銅鐸6個がいずれも全高約20cmと小型なのに対し、これと製作年代の重複する加茂岩倉遺跡出土銅鐸がいずれも全高約30cmあるいは約45cmと、より大型の点である。同じ集団が、全高約20cmの銅鐸は神庭荒神谷遺跡へ、より大型の銅鐸は加茂岩倉遺跡へと、分けて埋納したのかもしれない。

鉢かけ

銅鐸の鉢かけの多くは、無文の外型をあてがって熔錫を流し込んだ単純なものである。しかし、脱落を防ぐために円形の足がかりを作りつけた鉢かけや文様のある外型をあてがって熔錫を流し込んだ鉢かけも稀にあり⁽¹⁴⁾、前者はⅡ-2式で、後者はⅢ-2式で、それぞれ出現するようである。加茂岩倉遺跡出土銅鐸では、28号鐸(図版23-2)の鉢の付け根や8号鐸B面(図版29-1)の舞から第1横帯にかけて、円形の足がかりを有する鉢かけがあり、10号鐸A面(図版30-1)の左緒下端には、文様を有する外型を使った鉢かけがある。

補 刻

5・8・11・32・34・37号鐸の、文様の不鮮明な部位や鋲かけには、補刻がなされている。銅鐸の補刻はII-2～III-2式で盛行し、それ以前のI～II-1式はない、あるいはあってもごく稀と考えられるが、加茂岩倉遺跡出土銅鐸でも、補刻はII-1式には今のところみつかっておらず、II-2～III-1式に多い。I～II-1式の段階では、文様が不明瞭でもあまり問題にならなかったが、II-2式になると文様をできるだけ完全にあらわしたいという要求がだいに強まり、補刻が盛んとなったのである。さらにIII-1式になると同範銅鐸がほとんど作られなくなるが、これは、前記の要求がより強くなり、傷んだ鋲型を繰り返し使い文様が不鮮明な銅鐸を作ること自体を避けるようになったためと考えられる。

それでは、銅鐸の補刻は誰がしたのか。加茂岩倉遺跡、兵庫県桜ヶ丘遺跡、京都府梅ヶ畠遺跡ではII-1式がII-2式あるいはさらに新しい型式と共に共存しているので、II-1式にII-2式出現以降まで伝世するものがあったことが確実である。神庭荒神谷遺跡出土の6個の銅鐸のうち畿内系の2～6号鐸についても、共存した銅矛の型式から考えて、II-2式の出現以降まで伝世していた可能性が高い。もし補刻の多くが、製作者ではなく使用者によってなされたとすれば、II-2式だけでなく、伝世していたII-1式以前の型式にも文様の不鮮明な部分に補刻がなされた例が少なからずあってよいはずである。しかし、前記の4例の場合も含め、II-2式には補刻が顕著であるが、II-1式以前の型式には補刻がないようである⁽¹⁵⁾。このことから、補刻の多くは、銅鐸の製作時になされたと推定できる。

また、34号鐸（図版21-1）では、A面下区の5・6段目左端とB面上区の3・4段目左端の反転部を補刻で直線にしてしまっているが、これと同様の処理が、同範である鳥取県上屋敷鐸の片面下区の4～6段目左端にもみられる。このように遠隔地の別遺跡から出土した同範銅鐸に同じ特徴を有する補刻がみられることからも、この2個の場合は補刻が製作地でなされた可能性が高い。

ところで、II-2～III-1式の横型流水文銅鐸には、34号鐸や鳥取県上屋敷鐸の前記の補刻を含め、流水文をはじめとする文様を正確に表現していない補刻がしばしばみられる。その原因としては、補刻作業者に流水文の構成についての正確な知識がなかった、あるいは流水文の構成についての正確な知識はあったが略化して補刻した、のいずれかであろう。しかし、同時期の縦型流水文銅鐸の工人以上に、土器流水文の描法をかたくなに守り続け⁽¹⁶⁾、かつ銅鐸の画面形に適する新たな型の流水文を執拗に追求し続けた工人が、補刻にあたって甚だしい手抜きをする可能性が高いとすれば、補刻作業者は鋲型に流水文を刻した工人と別人で、流水文の構成についての正確な知識を有しなかったことになる。すなわち、横型流水文銅鐸の製作工人集団には、工種別の分業が存在したことになる。

鑄の刻み

33号鐸（図版17-2）の左右の鑄の縁には、鋳造後につけられた小さな刻みが、上部と下部にそれぞれ2個ずつ、計8個ある。同様の刻みは、兵庫県桜ヶ丘1号鐸、伝兵庫県大月山出土鐸、神庭荒神谷6号鐸にもあるが、4例ともに上部の刻みは身の上縫よりやや下がった位置に、下部の刻み

は身の下縁よりやや上にがった位置にあり、基本的に2個1組になっている。ただし、神庭荒神谷6号鐸では、片側の上部の刻みが7個と多く、鰐の巾位にまで及んでいる。また、兵庫県桜ヶ丘1号鐸と伝兵庫県大月山出土鐸は、全高はほぼ同じであるが、1組2個の刻みの間隔は前者では3.5cm前後と広く後者では1cm余りと狭い。

刻みを有する4個はいずれもII-1式であり、II-2式以降の銅鐸には、このような刻みを有する例はないようである。そして、類例が稀であるにもかかわらず、同じ特徴の刻みが摂津と出雲という遠隔地の出土例に共通してみられるので、この刻みは銅鐸の製作地でつけられた可能性がある。

この刻みがなぜつけられたかは明確でないが、紐や布などを巻きつけるための装置の可能性もある。なお、刻みを有する例がみられなくなるII-2式以降、鰐への飾耳の付加が一般化すること、刻みと飾耳が鰐の似た位置にあることを考えれば、飾耳が当初はこの刻みに類似する機能を有したものと考えられる⁽¹⁷⁾。

以上、現段階での銅鐸の観察結果とそれに関する若干の考察を記した。しかし、まだ銅鐸のクリーニングすら完了していない段階であり、今後の調査で情報が増加すれば、本稿の内容を一部改変する可能性があることをあらかじめ断っておきたい。

註

- (1) 銅鐸の型式分類は、難波1986・1987による。
- (2) 全高40cm余りの銅鐸は「中型」とされることが多いが、本稿では、加茂岩倉遺跡出土銅鐸の2種のサイズを呼び分けるためにこれを大型とし、全高約30cmのものを小型とする。
- (3) 左が外になっていた大型銅鐸で、右の()内が中に入っていた小型銅鐸である。以下も同様。
- (4) 京都府梅ヶ畠遺跡山上の4個の銅鐸は、全高が約30cmと約20cmの鐸が2組の入れ子になって出土したと伝えるが、この場合も外になっていた全高約30cmの鐸は2個ともに破損が著しいが、中に入っていた全高約20cmの鐸は破損していない。
- (5) 水銀朱の付着がこれまでに確認されている銅鐸は、徳島県源田3号鐸(III-2式)、同呉長者ヶ原1号鐸(III-2~IV-1式)、岡山県明見鐸(III-2式)、以上の3個で、ほかにベンガラの付着した例も数個知られている(魚島1992・小村1995)。その型式はII-2~IV-1式にわたるが、今のところ近畿式や三造式はない。よって、現段階の資料では、赤色顔料の塗布の盛行はIV-1式以前とできる。なお、複數個の銅鐸や青銅製武器形祭器が一括埋納された場合も、その一部の個体にしか赤色顔料の付着が確認できない場合が多い。これについては、①本来は一括埋納された青銅製祭器のすべてに赤色顔料が塗布されていたが、今は一部にしか顔料が残っていない、②同じ集団が保有する複数の青銅製祭器の一部にのみ赤色顔料が塗布された、③青銅製祭器に赤色顔料を塗布した集団と塗布しない集団があり、両者の祭器が集められた後に埋納された、などの可能性が考えられる。
- (6) 難波1991 pp77-103
- (7) 鈎上にがった銅鐸を鋳型からはずす際には、鋳型の鰐と身の作る稜付近や紐の菱環から内縁に破損が生じやすい(難波1991 pp87-90)。26号鐸の鋳型の補修痕もこの部位にみられるので、鋳型製作時に生じた破損の補修ではなく、鋳型をはずす時に生じた破損の補修であろう。
- (8) いずれにせよIII-1式はない、あるいはあっても前後の型式に比べて少数である。これに関連して注目され

るは、加茂岩倉遺跡に近接しており、後述するように緊密な関係があったと推定される神庭荒神谷遺跡から、中綱・中広形銅矛が16本と多数出土していることである。銅鐸と銅矛の並行関係についてはまだ不明確な点が多いが、Ⅲ-1式銅鐸が作られた頃、加茂岩倉遺跡や神庭荒神谷遺跡出土の青銅製祭器を保有した集団と畿内との関係が希薄となって銅鐸の流入が減る一方で、北部九州との関係は強まり、銅矛の流入が増えた可能性がある。

(9) 難波1991 pp60-76

- (10) 本文の⑧～⑩、および、下区の四頭渦文を構成する左右の双頭渦文が中央で接しない、上区を3分割してシカや四足獣の絵を鋲出す(23号鐸両面と35号鐸A面)、菱彫文様帯と外縁第2文様帯の界線が3条である(23号鐸両面と35号鐸B面)、以上の特徴は23号鐸と35号鐸に共通してみられるが18号鐸にはみられない。一方、鉈内縁が界線を重ねるだけの単純な構成である、上区にトンボの絵を鋲出す(18号鐸両面と35号鐸B面)、紐外縁第1文様帯と第2文様帯の界線が2条である(18号鐸A面と35号鐸A面)、紐外縁第2文様帯の鋸歯文のうち頂部とその左右の3箇所のそれはLR鉈歯文である(18号鐸A面と35号鐸A面)、下辺横帯のド界線が4条である、鉈外縁第1文様帯の頂部にLR鉈歯文を飾らない、以上の特徴は18号鐸と35号鐸に共通してみられるが23号鐸にはみられない。このように、23号鐸と35号鐸、18号鐸と35号鐸にはそれぞれ類似点が多いのに比べ、23号鐸と18号鐸には類似点が少ない。以上から、23号鐸→35号鐸→18号鐸、あるいは18号鐸→35号鐸→23号鐸の製作順が考えられる。本文の⑧～⑩といった特異な特徴を有しない点で、18号鐸は、23・35号鐸より畿内系の銅鐸に近い。この銅鐸群の特異性が、初期には比較的希薄で次第に強くなったりすれば18号鐸が、逆に、初期には強かったが次第に希薄となったりすれば23号鐸が、最も早く作られたことになるが、現段階ではいずれか明確でない。

18・23・35号鐸の銅鐸群以外の、身の区画内に四頭渦文を鋲出すⅢ-2～IV-1式の銅鐸群としては、渦森型とこれを祖型とする長者ヶ原型がある。この系列では四頭渦文が單線から複線に変化し、渦森型B類までは単線の例がみられるので(難波1991 註52)、18・23・35号鐸の単線の四頭渦文は渦森型A・B類と関係するかもしれない。また、長者ヶ原型の徳島県長者ヶ原1号鐸は、上区の上部を2条の横線で区切って鉈歯文を飾るが、これは23・35号鐸の上区を分割する特徴と類似している。以上から、18・23・35号鐸の銅鐸群の成立にあたっては、これらの銅鐸群の影響が考えられる。

- (11) この段階の四区袈裟導文銅鐸の身の上半の型持孔は、通常は上区のほぼ中位にあり、これらの例のように上区の下位にある例はまれである。なお、23号鐸両面と35号鐸A面では、上区が横線と縱線で3分割されており、身の上半の型持孔は左上区の左下小区内と右上区の右下小区内に正確に納まっている。このことから、工人は型持孔と文様帯との位置関係を正確に把握して中型に型持を作りつけていたことがわかり、銅鐸の中型の製作法を考える上で参考となる(難波1991 註4)。たとえば、削り中型や貼り中型の場合はこのように型持を設定することは容易だが、引き中型の場合は難しい。

- (12) Ⅲ-2式流水文銅鐸の明石型も全高約46cmである。Ⅲ-1式では、明石型の祖型である流水文銅鐸の有本型の多くが全高約46cmであるが、他の銅鐸群は小さく、この大きさの例はない。すなわち、Ⅲ-2式の流水文銅鐸や四区袈裟導文銅鐸にみられる全高約46cmという規格は、Ⅲ-1式の有本型の規格を受け継いだと考えられる。これに対し、Ⅲ-2式の六区袈裟導文銅鐸のほとんどやその祖型の桜ヶ丘4・5号型は、これよりやや小さい全高約42cmの規格で作られている。全高約42cmの例は、桜ヶ丘4・5号型のモデルとなったⅡ-1式に多いので、おそらくこれを踏襲したのであろう。

- (13) 弥生時代の青銅製祭器で記号状の刻線を鋲造後に入れた例としては、他に福岡県小倉西方遺跡出土の中広形銅矛(節帯の端面)、同県原町遺跡出土の中細形銅戈の一部(内)、長崎県大綱遺跡出土上の中広形銅矛の一部(節帯)などをあげることができる。このうち、小倉西方遺跡出土銅矛はすべての個体の節帯端面の2箇所に刻線があるが、刻線の形状等はいずれも類似しており、一人の手で同時期に刻されたようみえる。なお、小倉西方遺跡出土銅矛は10本がこれまで知られていたが、辰馬考古資料館蔵品に、同型式で鋒などの状態も類似し同じ刻線を有する佐賀市出土の銅矛が2本あり、これも、この遺跡の一括出土品の一部であろう。

- (14) 銅鐸の、円形の足がかりを有する鈎かけには、欠孔と繋げて円孔を穿つA類と、欠孔からやや離して円孔を穿つB類がある。A類は北部九州で作られた銅戈や銅矛にもみられる。また、文様のある外型をあてがって熔銅を流し込んだ鈎かけには、鋳造に使った外型を再使用する場合と、新たに文様を彫った外型を用意する場合がある。
- (15) 兵庫県桜ヶ丘遺跡出土銅鐸では、II-2式横型流水文銅鐸の3号鐸には補刻が顯著であるが、II-1式の1・2号鐸は文様の不鮮明な部分にも補刻がない。また、同遺跡出土のIII-2式の11号鐸にも補刻がある。京都府梅ヶ畠遺跡からはII-1式とII-2式が2個ずつ出土している。そのうち、II-2式2個には補刻が著しいが、II-1式2個は文様が不鮮明であるにもかかわらず補刻がない。
- (16) 難波1991 p68
- (17) ただし、刻みが基本的に鰭の上下2箇所につけられているのに対し、同時期の飾耳は鰭の中位にも作られることがある。また、上部の刻みが鰭上端よりやや下に位置するのに対し、上部の飾耳は鰭の上端あるいはそれよりやや上に位置する。

(参考文献)

- 魚島純一「エネルギー分散型蛍光X線分析による伝長者ヶ原銅鐸の表面顔料の調査」『徳島県立博物館研究報告』第2号 1992。
- 小村眞理「岡山県井原市出土銅鐸の保存処理」『元興寺文化財研究』No.53 1995
- 佐原 真『祭りのカネ銅鐸』歴史発掘⑧ 1996
- 難波洋一「銅鐸」『弥生文化の研究』第6巻 道具と技術Ⅱ 1986
- 難波洋一「銅鐸研究の現状と課題」『島根考古学会誌』第4集 1987
- 難波洋三「同范銅鐸2例」『辰馬考古資料館 考古学研究紀要』2 1991
- 春成秀爾「銅鐸の製作工人」「考古学研究」第39巻第2号 1992
- 島根県教育委員会「荒神谷遺跡銅劍発掘調査概報」 1985
- 島根県教育委員会「荒神谷遺跡発掘調査概報(2)銅鐸・銅矛山土地」 1986

表1 加茂岩倉遺跡出土銅鐸一覧

No	全高(略測cm)	型式	文様	備考
1号	46.5	III-2	四区袈裟尊文	4号鐸と入れ子(推定) 紐に「×」の刻線 加茂岩倉26号鐸と同范
2号	44.0	II-2?	二区流水文	3号鐸と入れ子
3号	約30	II?	不明	2号鐸と入れ子
4号	31.0	II-1	四区袈裟尊文	1号鐸と入れ子(推定) 加茂岩倉7・19・22号鐸、和歌山県太田黒田鐸と同范
5号	44.5	II-2	二区流水文	6号鐸と入れ子 紐に「×」の刻線 兵庫県氣比2号鐸と同范
6号	31.5	II-1	四区袈裟尊文	5号鐸と入れ子 加茂岩倉9号鐸、辰馬419号鐸と同范
7号	30.0	II-1	四区袈裟尊文	28号鐸と入れ子(推定) 加茂岩倉4・19・22号鐸、和歌山県太田黒田鐸と同范
8号	46.0	III-2	六区袈裟尊文	9号鐸と入れ子
9号	31.5	II-1	四区袈裟尊文	8号鐸と入れ子 加茂岩倉6号鐸、辰馬419号鐸と同范
10号	46.0	III-2	六区袈裟尊文	身に重渦文、紐の外縁と下辺横帯に重弧文 紐に繪柄(カメ)
11号	44.0	II-2	二区流水文	12号鐸と入れ子 紐に「×」の刻線 徳島県川島鐸と同范
12号	残高30.0 紐は欠損	II-1?	四区袈裟尊文	11号鐸と入れ子
13号	約45	II-2?	四区袈裟尊文	14号鐸と入れ子 紐に「×」の刻線
14号	約30	II-1?	不明	13号鐸と入れ子
15号	44.0	II-2 or III-1	二区流水文	16号鐸と入れ子 伝淡路島出土本興寺藏鐸と類似
16号	約30	II-1?	不明	15号鐸と入れ子
17号	29.5	II-1	四区袈裟尊文	奈良県上牧鐸と同范
18号	47.0	III-2 or IV-1	四区袈裟尊文	19号鐸と入れ子 紐に「×」の刻線 身の上辺内に繪柄(トンボ)
19号	30.0	II-1	四区袈裟尊文	18号鐸と入れ子 加茂岩倉4・7・22号鐸、和歌山県太田黒田鐸と同范
20号	45.0	III-2	六区袈裟尊文	紐の内縁に重弧文

No	全高(略測cm)	型式	文様	備考
21号	44.0	II-2	三区流水平文	横帶に繪画(シカ) 兵庫県氣比4号鉢、伝大阪府陶器出土鉢、伝福井県井向山土鉢と同范
22号	31.0	II-1	四区袈裟摩訶文	鉢に「×」の刻線 加茂岩倉4・7・19号鉢、和歌山県太田黒田鉢と同范
23号	49.0	III-2 or IV-1	四区袈裟摩訶文	鉢に「×」の刻線 身の上区内に松画(シカ、四足獸)
24号	31.0	II-1	四区袈裟摩訶文	
25号	30.5	I-2 or II-1	四区袈裟摩訶文	
26号	47.0	III-2	四区袈裟摩訶文	27号鉢と入れ子(推定) 鉢に「×」の刻線 加茂岩倉1号鉢と同范
27号	31.5	II-1	四区袈裟摩訶文	26号鉢と入れ子(推定)
28号	44.0	II-2 or III-1	二区流水平文	7号鉢と入れ子(推定) 鉢に「×」の刻線
29号	46.2	III-2	六区袈裟摩訶文	30号鉢と入れ子 鉢に繪画(鰐)
30号	31.5	II-1	四区袈裟摩訶文	29号鉢と入れ子
31号	44.2	II-2	二区流水平文	39号鉢と入れ子 鉢に「×」の刻線 加茂岩倉32・34号鉢、鳥取県上屋敷鉢、兵庫県桜ヶ丘3号鉢と同范
32号	45.0	II-2	二区流水平文	33号鉢と入れ子 鉢に「×」の刻線 加茂岩倉31・34号鉢、鳥取県上屋敷鉢、兵庫県桜ヶ丘3号鉢と同范
33号	30.0	II-1	四区袈裟摩訶文	32号鉢と入れ子
34号	44.0	II-2	二区流水平文	加茂岩倉31・32号鉢、鳥取県上屋敷鉢、兵庫県桜ヶ丘3号鉢と同范
35号	46.5	III-2 or IV-1	四区袈裟摩訶文	36号鉢と入れ子 鉢に「×」の刻線 身の上区内に繪画(シカ、四足獸、トンボ)
36号	約30	II-1?	不明	35号鉢と入れ子
37号	44.0	II-2	四区袈裟摩訶文	38号鉢と入れ子 片面の縫接帶は網代文と複合鋸齒文 鉢に繪画(シカ)
38号	32.0	II-1	四区袈裟摩訶文	37号鉢と入れ子
39号	約30	II-1	四区袈裟摩訶文	31号鉢と入れ子

※ この他に採取した多数の破片があるが、個体の同定や接合関係等は検討中。

第5章 まとめ

加茂岩倉遺跡からは、銅鐸39個の大量の銅鐸が出上した。それまでの、大岩山遺跡（滋賀県野洲町）の3カ所からの24個、神岡桜ヶ丘遺跡（神戸市）の14個を上回り史上最多の出土数となった。そして、出雲地方からの銅鐸出土数は伝えられるものを含めて50個となり、旧国別でみても出雲国は最多を数えることとなった。また、工事中の偶然の発見のため遺跡は半壊し、ほとんどの銅鐸は工事により取り出されていたが、発見者の機転により、一部の埋納坑と埋納状態の銅鐸が遺跡に遺され、部分的ではあるが、発掘調査により銅鐸の埋納状況を知ることができたことは最大の成果であった。ここでは、最後にその埋納状況について若干述べてみたい。

立地

埋納地の立地についてみると、加茂岩倉遺跡は狭長な谷の最奥部の丘陵斜面中腹に立地している。銅鐸の埋納地には本遺跡のように、山腹や丘陵斜面で屋根や稜線に隠れて見通しのきかない山陰に埋める場合が多いことが知られている。数は少ないものの山頂などの眺望のすぐれた場所に埋められる例や、近乍平野部での発見例が増え、集落遺跡やその縁辺、低湿地や湖沼、河川の岸辺からの出土例も知られ埋納地の環境は多様である⁽¹⁾。

埋納坑と埋土

埋納坑は急峻な丘陵斜面を地山の花崗岩風化上までテラス状に削り出して整地した平坦面から掘られている。埋納坑の掘削で特徴的なのは、銅鐸が納まる程度の深さに地山を堅掘りした後に側壁面を横掘りして掘り、坑底が坑縁より広い袋状になっている点である。特に、31号鐸は砲弾状に横掘りした穴に鐸上半部を押し込むように納められていた。坑内埋土は丘陵周辺で見られる土と同質とみられる暗褐色粘質土と黄褐色砂質土が互層状に堆積していた。互層は場所によって様相が異なり、意図的とみるならば、埋土を使い分け、他の鐸に比べ29号鐸はより丁寧に埋置されたと考えられる。

銅鐸の埋納順序

坑内での埋置レベルを比較すると5個とも上面はほぼ同じであるが、下面を比べると29号鐸だけが最も低く、坑底直上の粘質土に接していたので、他の4鐸より早く据え置かれたように思われる。31号鐸との先後関係は、坑壁を横掘りして拡張している点や鐸下面の互層の層序関係から29号→31号の順が想定できる。31号鐸と隣接する2つの圧痕では、31号鐸に2号圧痕の銅鐸が、2号圧痕の銅鐸に3号圧痕の銅鐸が寄りかかるような位置関係にあることから31号鐸→2号圧痕→3号圧痕の順が推定できる。残る1号圧痕（5号鐸）との先後関係は手がかりに欠けるが、29号鐸の配置との共通点すなわち上に向く鏽側縁が水平に保持されるうえ、同一レベルに揃うことから2鐸の配置はほぼ同時であったかもしれない。条件付きながら5鐸の配列順を29号鐸・1号圧痕（5号鐸）→31号鐸→2号圧痕→3号圧痕と推定した。

配列の復元

工事によって掘り出された銅鐸について、その表面の土の観察から配列状況の推定を試みたが、

2次的な上の付着により復元するには至っていない。原位置を保つ銅鐸と圧痕から配列を推定する上で問題となるのは、5号鐸の長軸方向である。それは5号鐸と他の4鐸の方向のずれ（第8図 図版7-2）を意図的とみるか否かによって埋置の様相が異なるからで、現地で配列状況の検討を行った際にも意見が分かれた。一方は他の4鐸と本来同一方向だったのが配置の際に若干動いたとし、東西4列南北5列の整然とした配列を想定した（図版8-1）。他方は5号鐸の位置を当初から意図したものとして鐸の長軸方向を異にする東西2群の配列を想定した（図版8-2）。銅鐸相互の距離は縦列（29・31号）、並列（31号鐸・2・3号圧痕）ともにはば密接し、5号鐸とその隣に位置した鐸も鈎の状況から同様であったと考えられる。2つの復元案も鐸の密集した状況を想定しており、必要最小限の埋納面積が 2×1 m程度であることを示している。ただし、全てが密集していたかどうかは不明であり、鐸が一面に配列されていたかどうかも今のところ不明である。

大多数の銅鐸が掘り出されている以上配列の復元は非常に困難であるが、大型鐸の埋置時の傾きや鈎の状況の観察から得られるいくつかの断片的な事実を手がかりに配列を検討することが今後の課題となろう。

埋置の特徴

銅鐸埋置の最大の特徴は、大小の鐸がいわゆる入れ子にしてあったことである。個々の組み合せの詳細な状況は現在調査中であり、最終的な結果は正式な報告書に譲ることとし、ここでは大型鐸の据え方について述べてみたい。29号鐸と5号鐸の上方の鈎側縁が水平でしかも同一レベルに揃うことは既に述べたが、これが意図的な埋置であることは29号鐸下面の互層の堆積状況から明らかである。5号鐸は圧痕直下で埋土の一部が失われていたため不明確な点もあるが、鈎を傾けながらも29号鐸を意識するように鈎側縁を水平に揃えていることから、意図的な置き方と考えられる。同様の埋納例は加茂岩倉以外にもあり⁽²⁾、ほかにも鐸本体の軸を水平にするものや⁽³⁾、下方の鈎側縁を水平にするものもある⁽⁴⁾。類例が坑底面自体を傾斜させているのに対し加茂岩倉遺跡では水平な坑底面上で鐸を傾け据えていることから、その意図がより明確と言える。

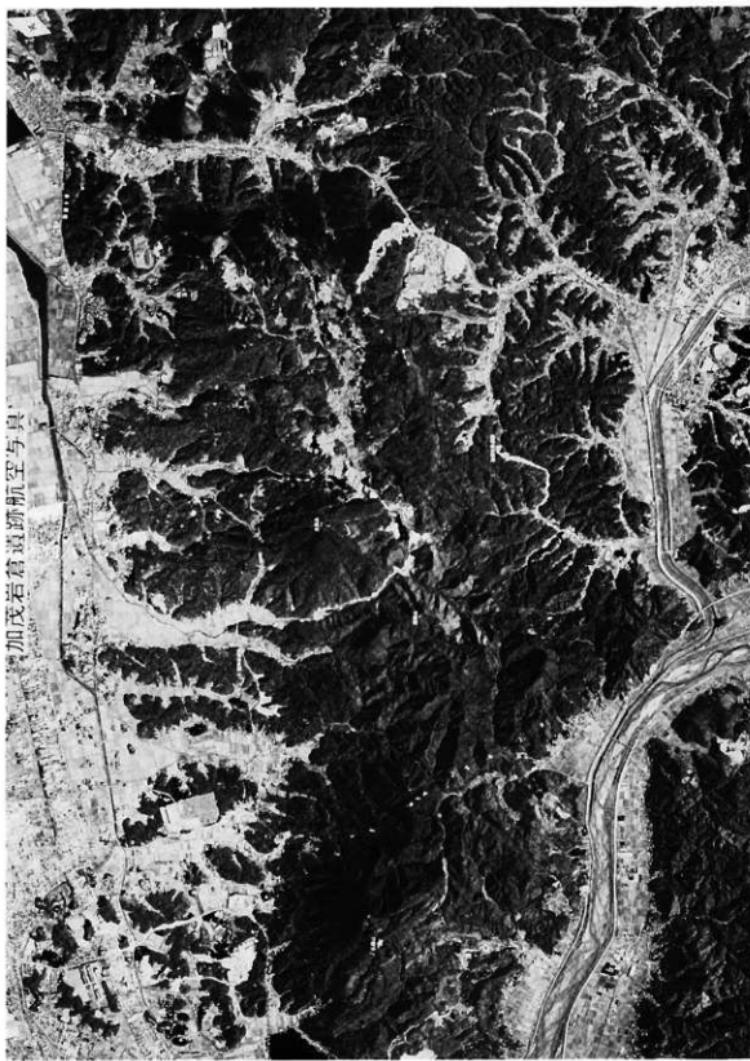
入れ子にして身を横たえ、鈎を立てたうえに鈎上方を水平にする手法が確認できたことは調査成果の一つといえるが、このような埋置方法が埋納行為上にしめる意味については不明といわざるを得ない。ただし鐸の配列に際し意識的にその特定部位の高さを揃えることに注意が払われていることから、配列作業自体が無造作に行われたのではなく、特定の意味を持つ埋納過程の一行為であったと考えられる。銅鐸の埋納を祭祀と関係づけて考えるなら、なんらかの儀礼的行為として解釈することも可能かもしれない。

銅鐸の埋納状況を明らかにすることは、銅鐸がなぜ埋納されたのかという問題に迫る一要素といえる。単独埋納と複数埋納例、埋納地の環境や埋納方法など、他遺跡との類似、相違点についての比較検討や同じく大量の青銅器が出土し、位置関係や共通する「X」の刻線などから本遺跡との関連性が注目される神庭荒神谷遺跡との関係など、この報告では述べることができなかった。今後の課題としたい。

註

- (1) 寺沢薰「銅鐸埋納論（上）（下）」『古代文化』第44巻第5・6号 1992
- (2) 岡本寛久・平井泰男・朝倉秀昭「岡山県岡山市高塚遺跡」『日本考古学年報』42（1989年度版）1991
- (3) 安井良三「跡部遺跡発掘調査報告書」（財）八尾市文化財調査研究会報告31 1991
- (4) 一山典・勝浦康守「徳島市名東遺跡出土の銅鐸」『考古学雑誌』第73巻第4号 1988

図 版



加茂岩食遺跡と周辺の遺跡（航空写真）

図版 2-1



遺跡近景(工事前)

図版 2-2



遺跡近景(発見時)

図版 3-1



埋納状態の銅鐸と圧痕（発見時）

図版 3-2



発見時の出土銅鐸

図版 4-1



擾乱土中の銅鐸出土状況

図版 4-2



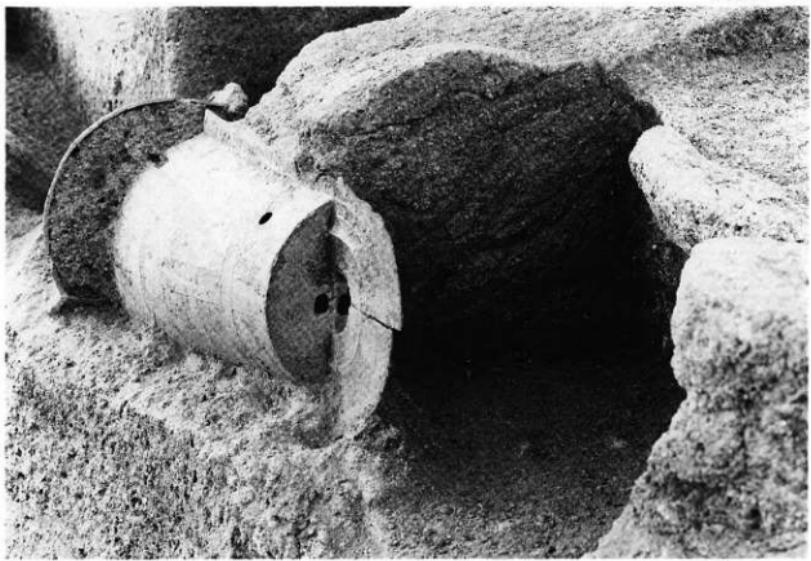
擾乱土除去後の状況

圖版 5-1



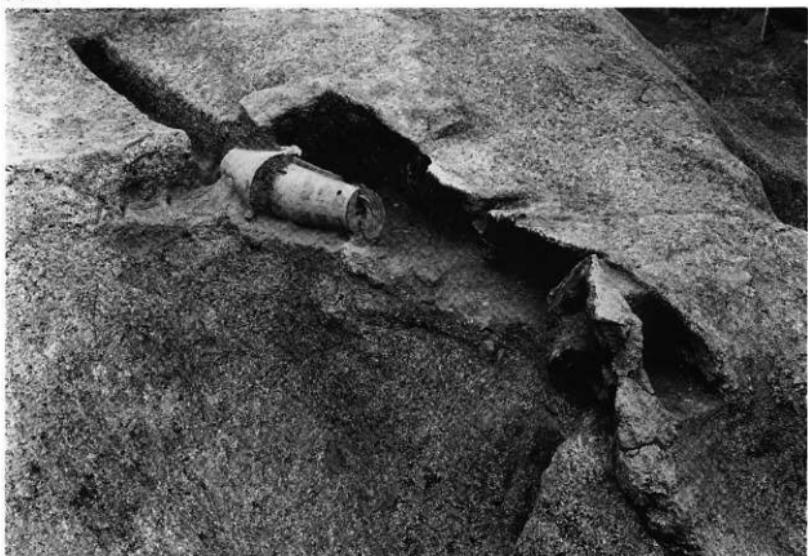
埋納坑埋土堆積狀況

圖版 5-2



埋納坑埋土堆積狀況

図版 6-1



埋納坑と銅鐸出土状況

図版 6-2



埋納坑と銅鐸出土状況（31号鐸）



1号压痕



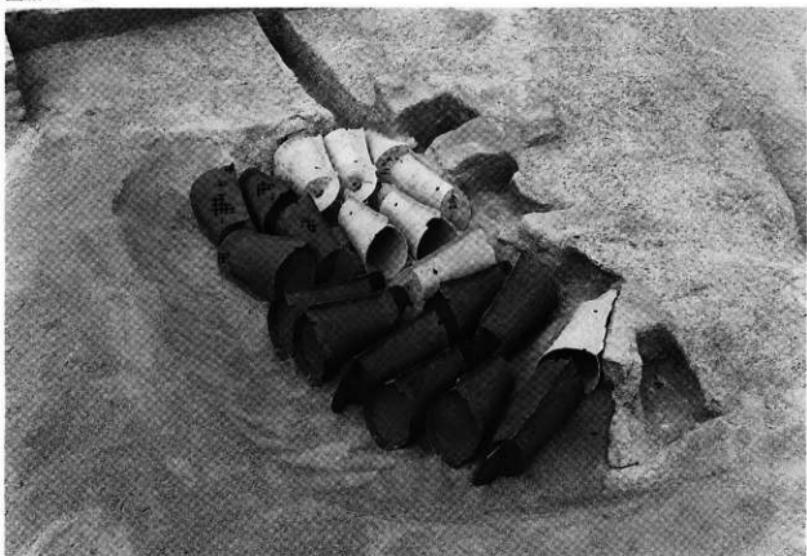
銅鐸配列状況（5号鐸ほかを压痕に置いて復元）

図版 8-1



銅鐘配列状況の復元（1）

図版 8-2



銅鐘配列状況の復元（2）

図版 9-1



埋納坑完掘状況（南東から）

図版 9-2



埋納坑完掘状況（南から）

図版 9-3



埋納坑完掘状況（東から）

図版10- 1



入れ子の状態
(35 (36) 号鐸)

図版10- 2



同 (5 (6) 号鐸や
6 号鐸を抜いた状態)

図版10- 3



6 号鐸 (抜き取り直後
の状態)

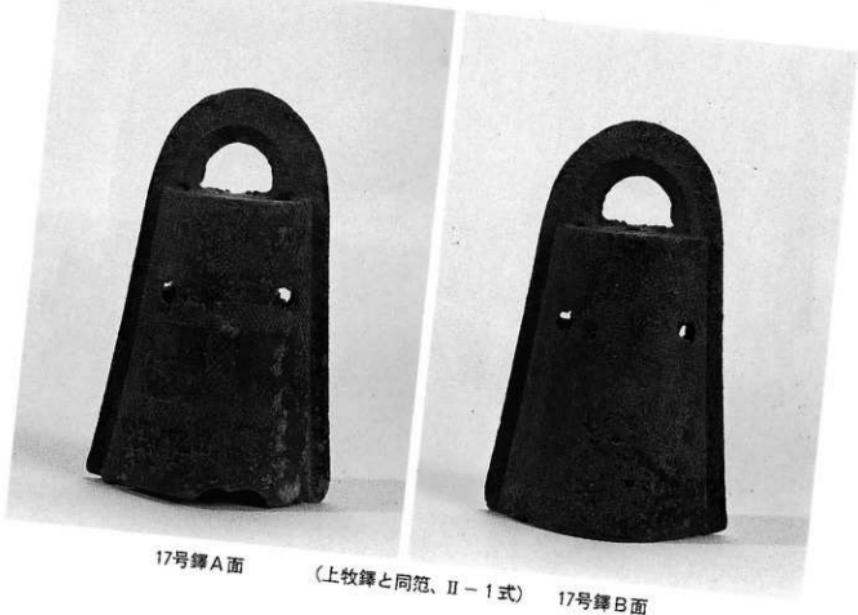


加茂岩倉遺跡出土銅鐸

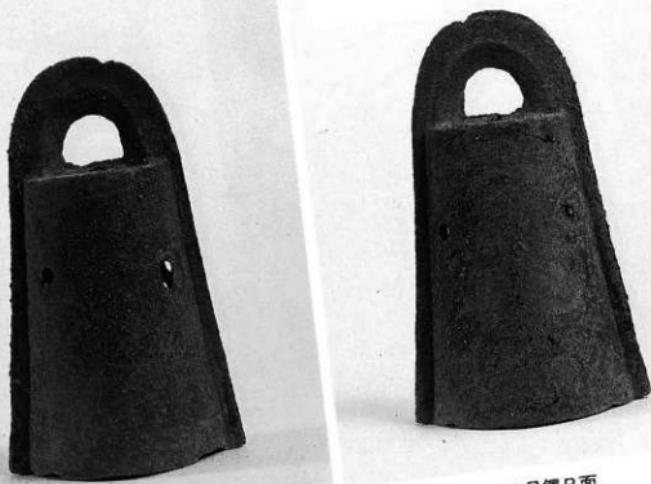
図版12-1



図版12-2



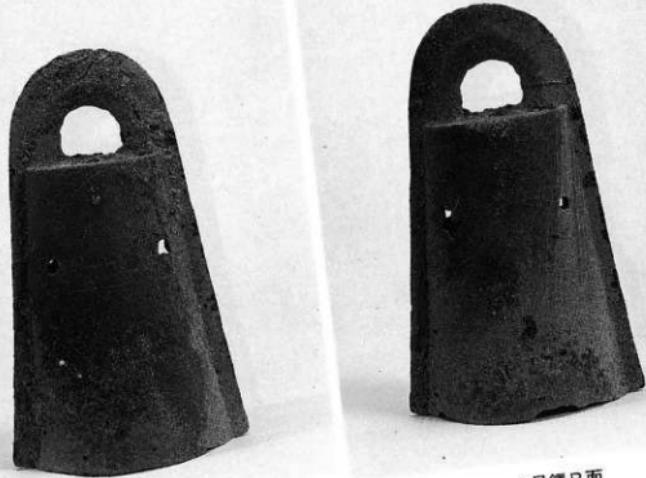
(上牧鐸と同范、II-1式) 17号鐸B面



6号鐘A面 (9号鐘などと同范、II-1式)

6号鐘B面

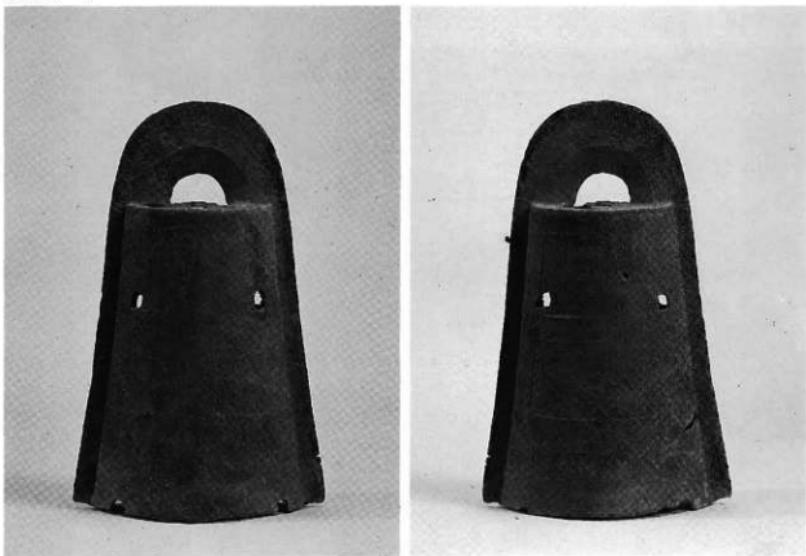
図版13-2



9号鐘A面 (6号鐘などと同范、II-1式)

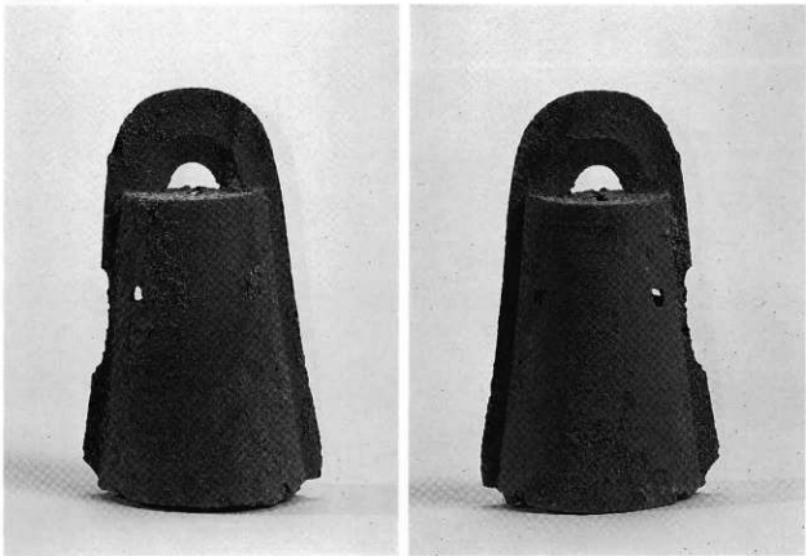
9号鐘B面

図版14-1

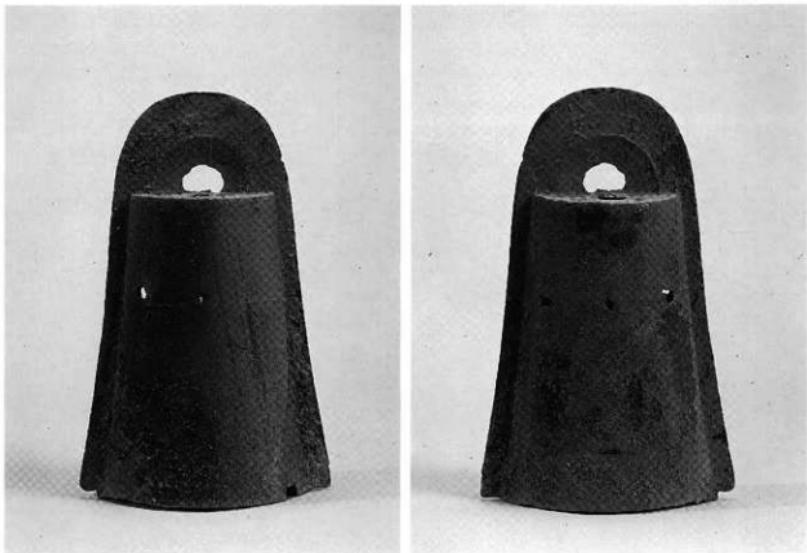


22号鐸A面 (19・4・7号鐸などと同范、II-1式) 22号鐸B面

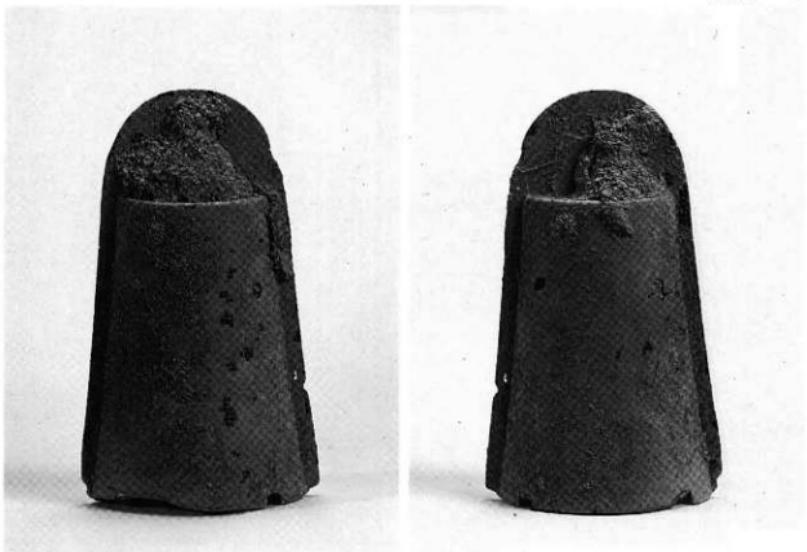
図版14-2



19号鐸A面 (22・4・7号鐸などと同范、II-1式) 19号鐸B面

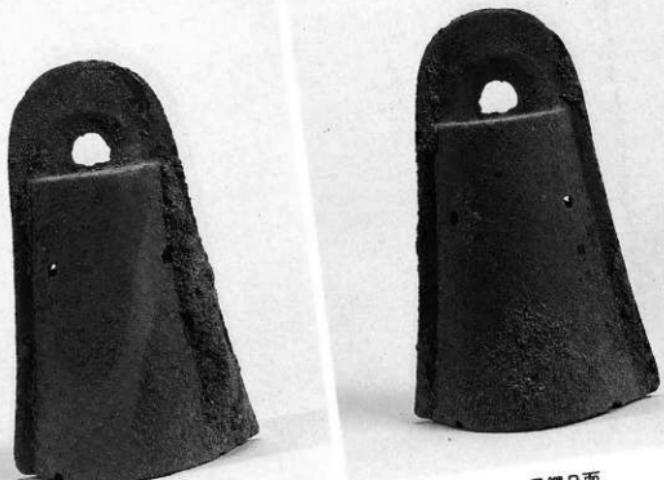


4号鐸A面 (22・19・7号鐸などと同范、II-1式) 4号鐸B面



7号鐸A面 (22・19・4号鐸などと同范、II-1式) 7号鐸B面

圖版16-1

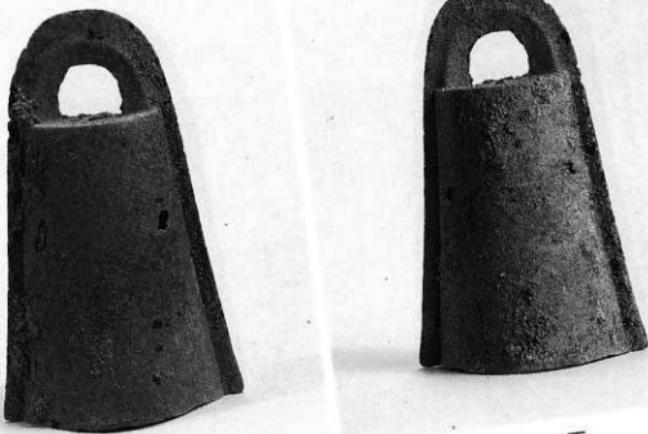


24號鐸A面

(II-1式)

24號鐸B面

圖版16-2

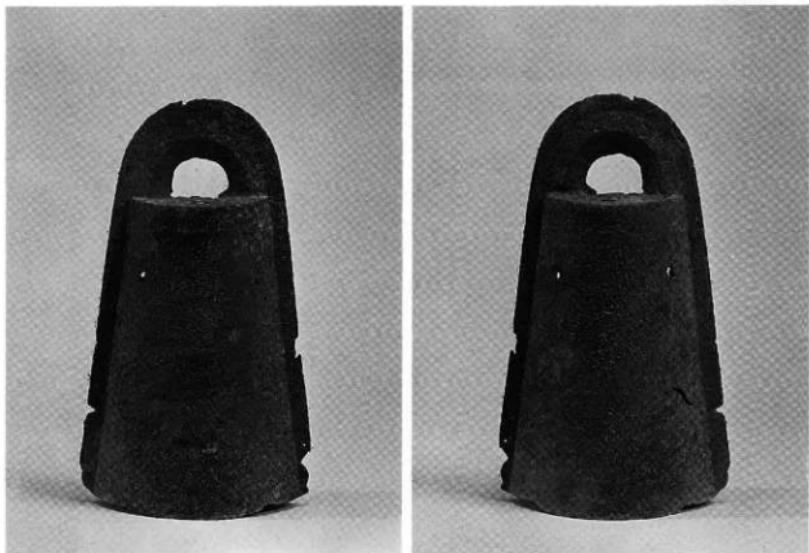


27號鐸A面

(II-1式)

27號鐸B面

図版17-1

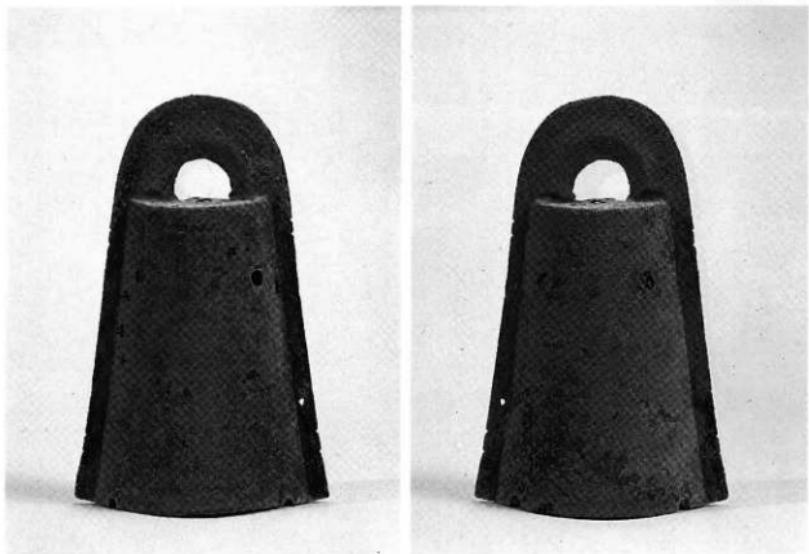


30号鐸 A面

(II - 1式)

30号鐸 B面

図版17-2

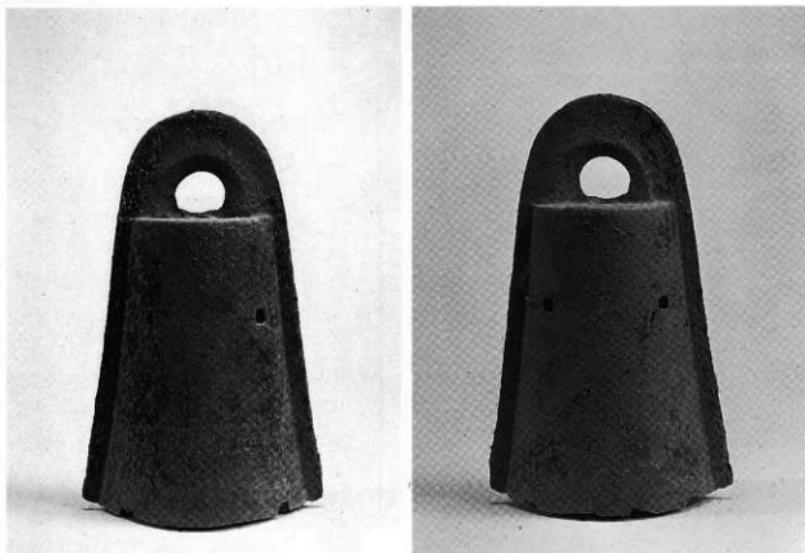


33号鐸 A面

(II - 1式)

33号鐸 B面

圖版18—1

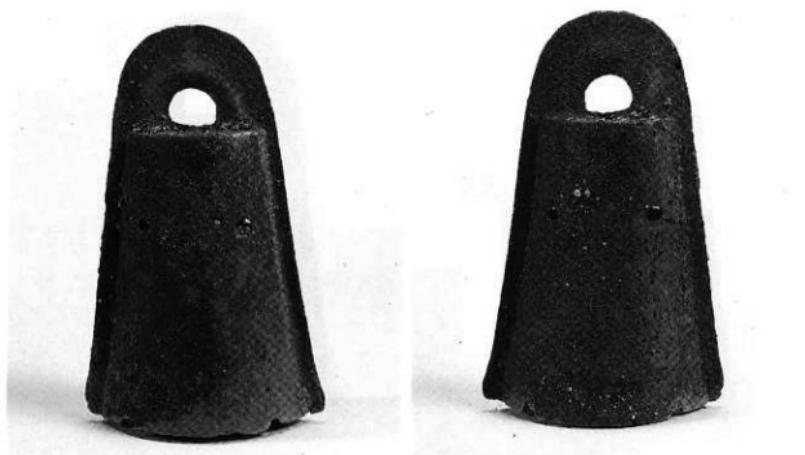


38号鐸 A面

(II - 1式)

38号鐸 B面

圖版18—2



39号鐸 A面

(II - 1式)

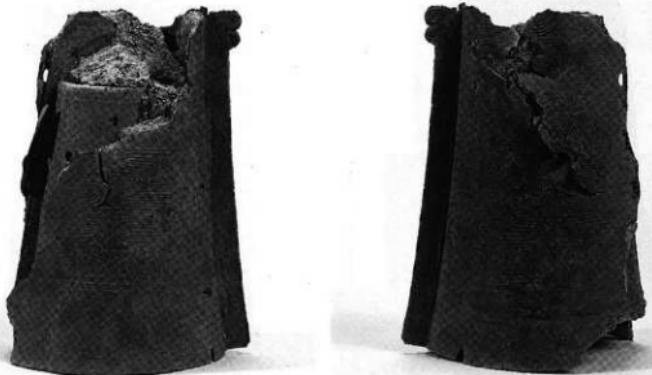
39号鐸 B面



2 (3) 号鐸A面

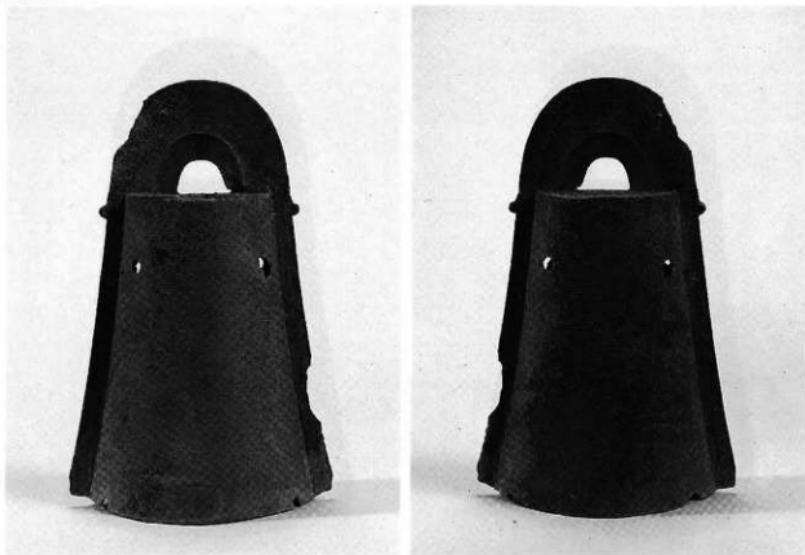
(2号鐸はII-2式か)

2 (3) 号鐸B面



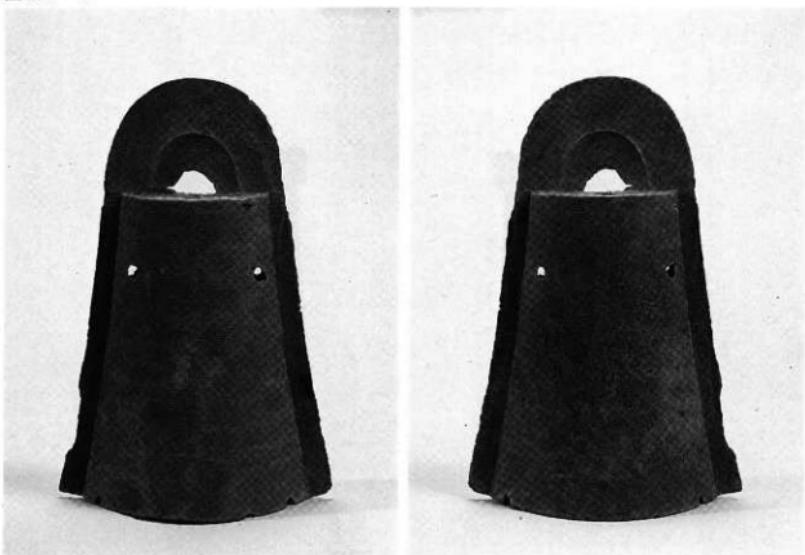
11 (12) 号鐸A面 (11号鐸は川島鐸と同范、II-2式) 11 (12) 号鐸B面

図版20-1

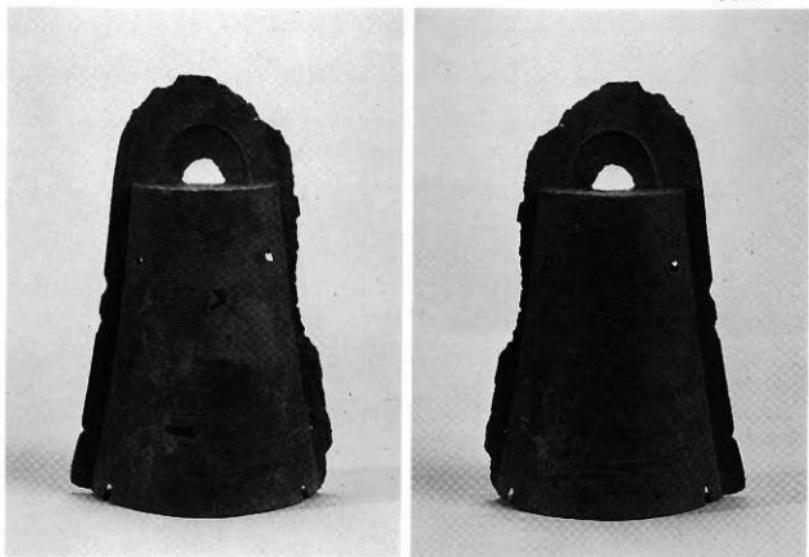


31号鉢A面 (32・34号鉢などと同范、II-2式) 31号鉢B面

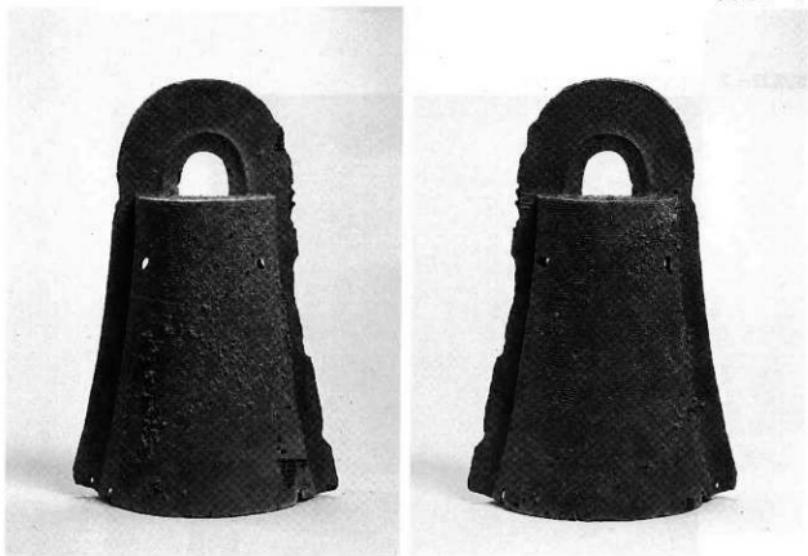
図版20-2



32号鉢A面 (31・34号鉢などと同范、II-2式) 32号鉢B面

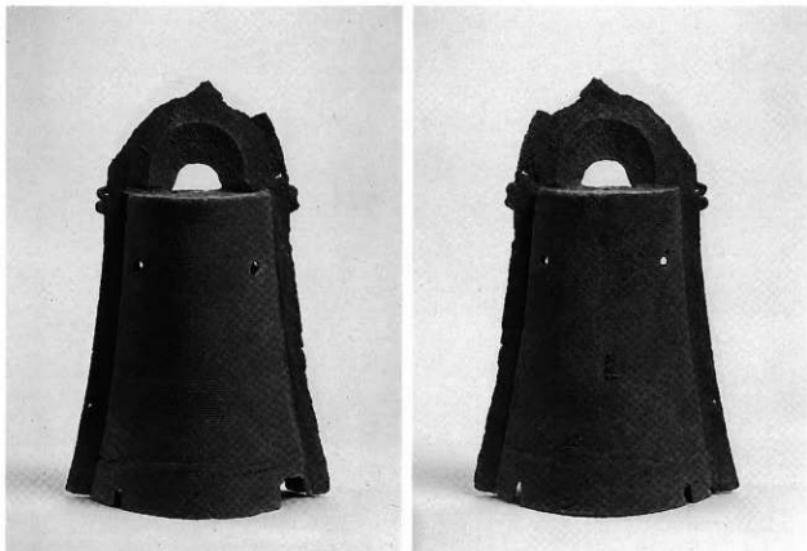


34号鐸A面 (31・32号鐸などと同范、II-2式) 34号鐸B面



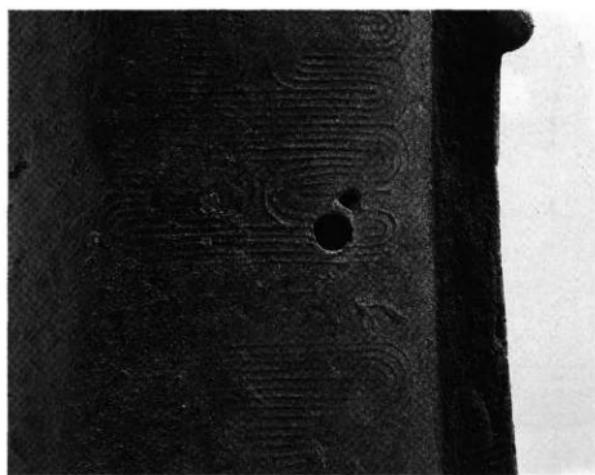
5号鐸A面 (氣比2号鐸と同范、II-2式) 5号鐸B面

図版22-1

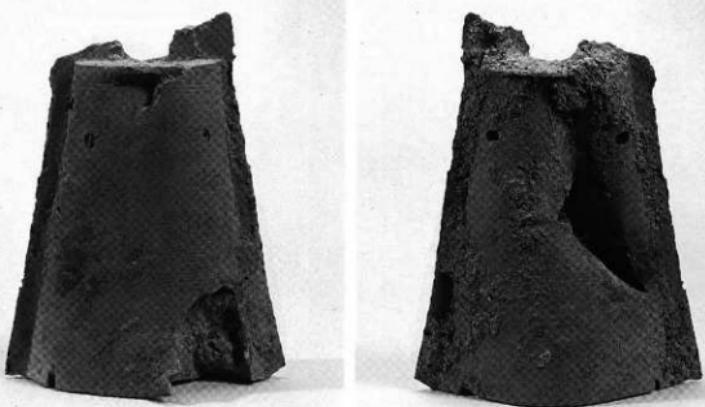


21号鐸A面 (氣比4号鐸などと同范、II-2式) 21号鐸B面

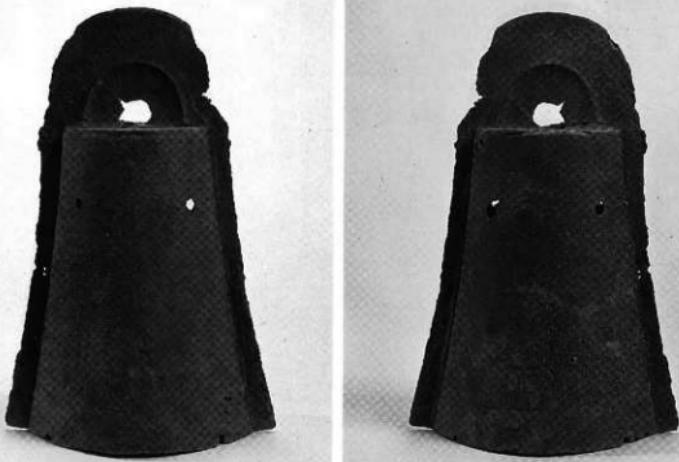
図版22-2



21号鐸B面 (シカ)



15(16)号鐸A面 (15号鐸はII-2式またはIII-1式) 15(16)号鐸B面

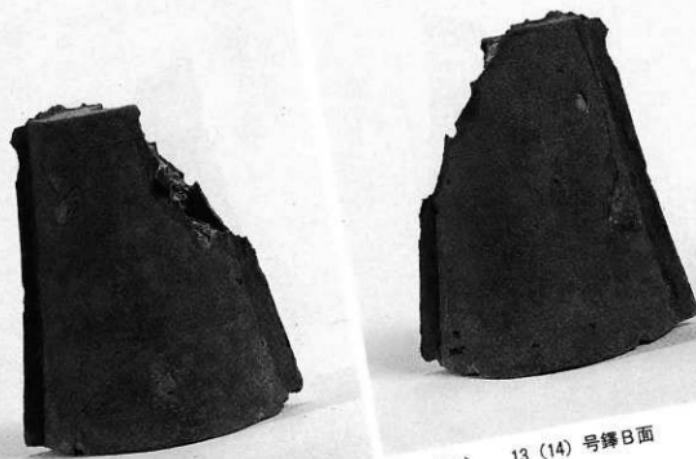


28号鐸A面

(II-2式またはIII-1式)

28号鐸B面

図版24-1



13 (14) 号鋒 A面

(13号鋒は II - 2式か)

13 (14) 号鋒 B面

図版24-2



37号鋒 A面

(II - 2式)



37号鋒 B面

圖版25-1



図版26-1



18号鐸 A面

(III-2式またはIV-1式)



18号鐸 B面

図版26-2



23号鐸 A面

(III-2式またはIV-1式)

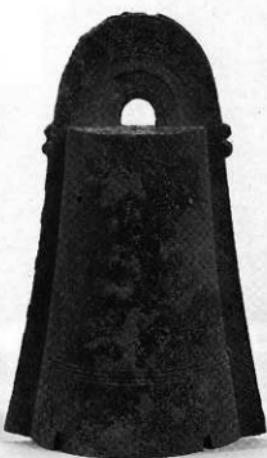


23号鐸 B面



35号鐘A面

(III-2式またはIV-1式)



35号鐘B面

図版27-2

図版27-3

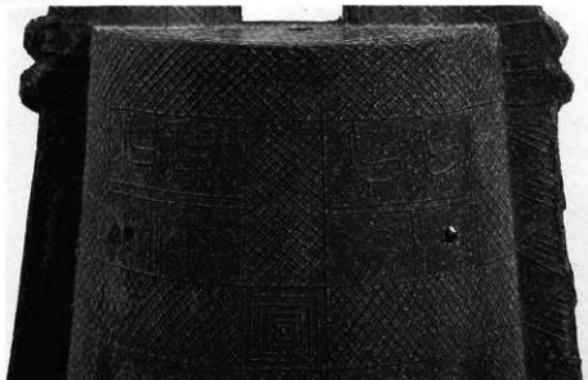


18号鐘A面（トンボ）



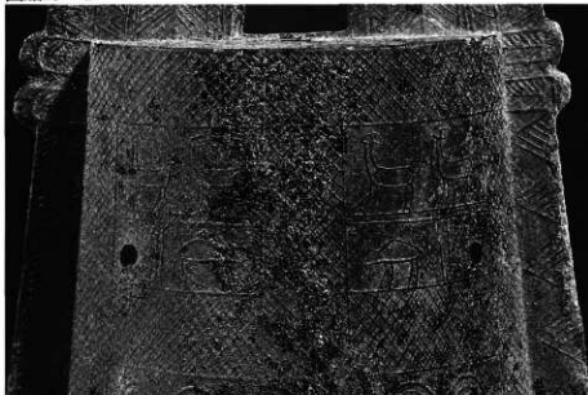
35号鐘B面（トンボ）

図版28-1



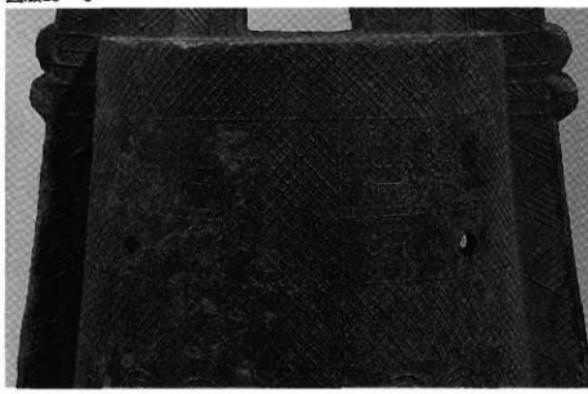
35号鐘A面
(シカ・四足獸)

図版28-2



23号鐘A面
(シカ・四足獸)

図版28-3



23号鐘B面
(シカ・四足獸)

图版29-1



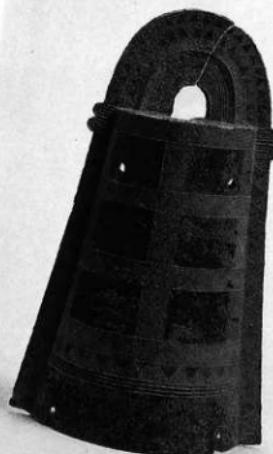
8号铎A面

(III-2式)



8号铎B面

图版29-2



20号铎A面

(III-2式)



20号铎B面

図版30-1

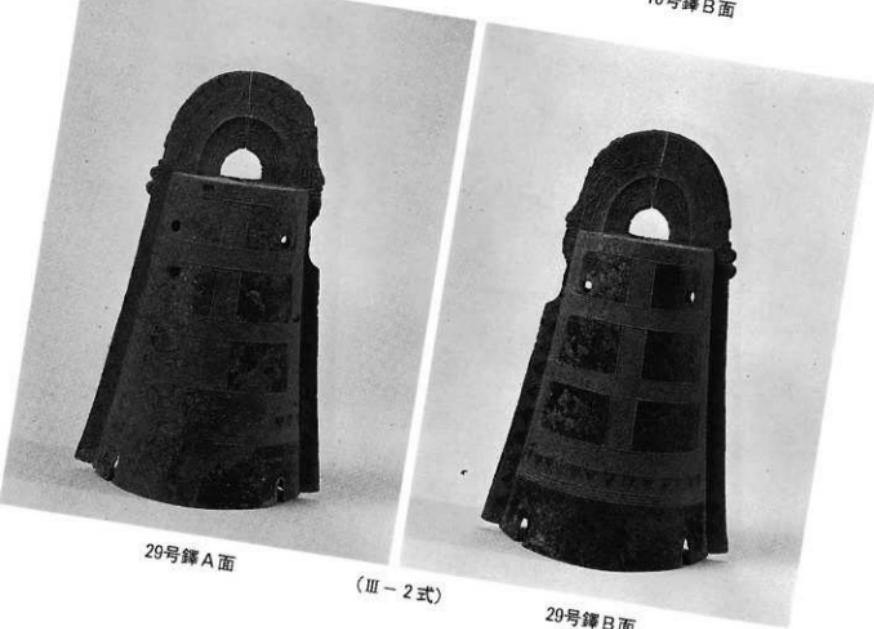


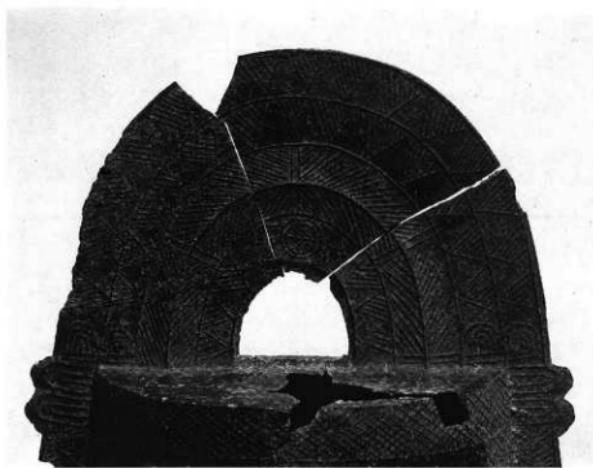
図版30-2

10号鐘A面

(III-2式)

10号鐘B面





10号鐸B面鈕（カメ）



29号鐸B面鈕（顔）

図版32-1



11号鋸A面鉋（「×」の刻線）

図版32-2



遺跡一般公開の風景（平成8年10月19日）

報告書抄録

ふりがな	かもいわくらいせきはっくつちょうさがいほう いち					
書名	加茂岩倉遺跡発掘調査概報 I					
編著者名	吾郷和宏、熱田貴保、難波洋三					
編集機関	加茂町教育委員会					
所在地	〒699-11 島根県大原郡加茂町大字宇治303 0854-49-8510					
発行年月日	西暦 1997年3月31日					
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査時期	調査面積 m ²	調査原因
かもいわくら 加茂岩倉	しまねけん おおはらぐん かもくら 島根県大原郡加茂町 おおあさいわくらあざみなみがさこ 大字岩倉字南ヶ廻 837-11	32362	35度 21分 24秒 132度 53分 9秒	199611～199703	400	補助事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
加茂岩倉	銅鐸埋納地	弥生時代	銅鐸埋納坑 土坑	銅鐸39個	史上最多の銅鐸39個が出土。銅鐸の埋納坑および埋納状況を確認。	

加茂岩倉遺跡発掘調査概報 I

発行 平成9年3月

編集 烏根県加茂町教育委員会
島根県大原郡加茂町大字宇治303

印刷 勝報光社
島根県平田市平田町993